

一休 隱居 傳

百九十四

こま其ま、神前へとなつてさて、御筆跡見事に候梅人と見申ひかえかを申ければ和尙
つてよく神察しられたる日れの都紫野の一休と云ものなりと仰られければさてはかたてき、
つたへし和尙にてましますかとてかの神前ふさ、びぬれしをとり来りてその事に御名を
傳給へと并がふふとさす後の代かこり神どもなりなんぞ一休老人偶題を記す臣ふ其時よ

山里放光

山道吟落書三

山海浪高船片雲社

山一庵等一扶桑神片隈景

山一客成拜觀真人輪座春

山一樓鐘時月輪僧宮

山一谷洗流煩本

山一花酒觀

一休老人偶題

はた敬信の一休和尙なごとして自宅へ廻し懐絶て庭をのき杓子で手をそり御馳走申事なごかな

ちす折ふし花のきかりをれを庭前のひなをも見たまへとて酒肴をいたしてなくきめ申さてか
の信申けるハ此山へまた御馳参さる。事もかかろがたし末代の資ともなすべければ何にても
一筆遊し給れと申ければ安事なり御座みあれとのたまへばさても拜殿ふての御作の詩体とい
はしへよりもかゝる体の侍りけるのとふたにかふも古へより百りし事なり唐土の東坡居士
の經山寺にて作りし詩体なりとかたり給へさてくめづらしき詩やされさかゝる山奥に住
みとよ學文もなき文盲の我々が目なれ耳なれす候相成べくは愚なる我々が耳なれ目なれたる
事をねがふなりと申上げれば和尙うちうあづき給ふ折から春風ふきて櫻のさちくさちりけ
れと貴之のうたを思ひ出されて

櫻ちる木のした風はさむかすで

空よしられぬ雲をふりける

これといか何どのたまへと彼僧いや是もいまだ耳なれ申さやも鹿はりといふ文とくちらの花の
風みちらされさつくと見だれければ其ま、

尊やこんとあられやこんと御寺の

かきの木に一はいふりつもれこんと

隠はいかよと申されければ彼僧大ふうち笑ひててもめきけたる御僧かたにかに耳なれ目なれ

一休 傳 國 傳

百九十五

とあるはしければ彼僧切もよき御かる口や實に見され聞なれしをのき返けること思されとて
御口のかるきをかんじ侍るかくて色々馳走申ければ次手あれと東坡が詩を書たへしとて

きねが鈴海山木ふ里谷のふえ

入あひのか糸に庭前のはち

とあるはしければ彼僧切もよき御かる口や實に見され聞なれしをのき返けること思されとて
御口のかるきをかんじ侍るかくて色々馳走申ければ次手あれと東坡が詩を書たへしとて

山鳥菓來
山花發茂林
山雲飛片脩
山遠路幽深

山鳥菓來
山花發茂林
山雲飛片脩
山遠路幽深

山鳥菓來
山花發茂林
山雲飛片脩
山遠路幽深

山鳥菓來
山花發茂林
山雲飛片脩
山遠路幽深

○愛に罪にでの事ありしは一休和尚へ常ふ参りて御心安く御意を得たる又次郎といふ町人あり
けるあるとき河豚汁をした、か食てけるが殊の外に酔ひ終にその日のうちふ死しなるが今と
の時ふ申けるは我世にありしときは死る事いつの頃やと思ひけるをれを後世にて聞ひ置
し事もなくされども一休和尚へ常にまこと申し侍物たりとも承り去結縁なれり引導をもた
のと奉れがゆる不慮の死を仕けりさこそ哀れも思召すらめかならずといひ置で終にもまじ
く成にける妻子眷屬なげきかなしき遺言の通りつゝ女さふ一休和尚へ申上ければいとやまき事
あり扱ふびんの仕合と仰られけるしかる所へはや時分もよく候間和尚御出をあふきたて
まつると再三人をたこしければ一休仰れけるはいや〜われら罷出るにふよばず引導つゝぶさ
に書てつかはすべし難にてもよみあげさせてふふむれよと仰られければ妻子なげけて遺言に
て候間ひらふ出下されよ御慈悲なりとさま〜ねがひければ一休のこまひけるはいや〜
御書が出ればかへつてかれがまよひとあるなり則書てつかひまよとて

海中有毒魚
名云河豚魚
面頰白存斑
人不食此魚
嗚呼痛哉又次郎
食之忽死來

卷五十四 彼處五十四

谷て魂敷十連百八類腦のきづあをぶつきたつて行たい方へつゝとひ
木曾十七貫の年角のないうろほよられ

と夢をばしてつかりされけるとあるやむかぬたのへ肝をひはれさをも仰されば其ごとく
かこたひけるお其引導の書たるを其子供秘藏して命も奪て其家のたかもど一かへもなれ
死て代と所持仕りて有なるとなり

扱前册に御約束申たる法語を書きて書らする

○若れちとせをへんこともあまづるとも羽衣よのふ

注 君との諸人なりいぬと、うへ唐の玄宗皇帝の御代みこころあるといふ人ごつをなして目の

前ふ宮殿ろうかかきなして女をくたして羽衣の曲をなさるむ玄宗皇帝を見たまふに

びしもあぐれへうせぬとふるき女に見へたりしかれをさるるをよふとも夢のこくにさる

んどのとか又四十里四方の石を羽衣みくたしてつとすといふ坊石のなとへあれば久き事

を見る人のこころはまかきやじ

○いんせらまじまきりつふふおびりつゝとてふもあまづるとも羽衣よのふ

いんせらまじまきりつふふおびりつゝとてふもあまづるとも羽衣よのふ

○我見ても久しくなまぬ住言の

まじのひぬまつらとてふもあまづるとも羽衣よのふ

われとは大明神なりまよふまよふのまじまきは言をばされたる彼時をいふなり姫松とはこやび

かかしていつまかへらぬ常盤木の見とりの本智よりふふなる大地のいまだはむまぢり

まの神代のをき彼岸の姫松を見てかへよまむ此神代のをきとらふり常盤木のいまだはむまぢり

胸さへ姫松といぬを人ごくそくの本智より松のみさなはめて四時しはまぬ物ゆえにたごへ

てかくいぬなり今も身を姫松に得れぬ不生不滅ふして變るる色なくくるこたへひされ

て彼岸にいたりて安樂あるべし諸人此断をしまてひめ松になれぬの事なり大明神といふ

字にみふきふぢれらぬなるかみとかく神をばあ、ろなりくらきまよひの人をあまづるか

する神也また一説に姫松が變化して大明神をなしてその歌を歌せしともあり是をこらせ

んため此古歌を引給ふなり

○目なしとち〜

目あしとて人ご具足の自性なり百姓本萬の見をばなるへおゆへいかく名付たりも一徳を

見法を見心を見有を見無を見本と見末を見すめて何にても一寸と見ても見る事ありは目

をりよして目なしにこそなし本まて名もあまづる方角所もあまづる天地に先だち萬物にみ

我て古來靈敏なく色形なふじそ千の色萬のかたちたぢらばる是世界国土の多量とぢらむ
るもの、本源なり佛とも具如とも阿彌陀とも觀音とも本智とも自性ともなふこれをして
を佛に在る人とも悟りの人ともいふなり釋迦一代の經文も皆此目まじとの事を人よふこ
らせんがこめなり

楞嚴經ふ阿那律陀無目不見と説給ひ

又同經ふ曰阿那律陀白佛言我因眼瞶見十方精爽洞然如觀掌果

如來印我成三宣阿彌陀

云々佛六圓通説たまふこれろのひとしな事是かよつてよの註を目なしては名付たりとら
くとはたづねることをおぼす

○こまのつひてまじませ

よびの音聲をたゞしもの何者ぞと明くればたがたづねるむじの目まじしたるは
あぢがよまかへのとてて尋ねむらるる人をたづねるもよも觀音菩薩の門をたづね
五のぼつじの事も第一の菩薩でつたまさはあぢがよまかへのとてて尋ねむらるる人を
たづねるもよも觀音菩薩の門をたづね

○扱一休和尚の御後と淨土宗はて有じとかや一休常にかな法語をかきてつかはし又の末か、み
もよも靈敏を送るは道とておし給へるもしかく御はとりをなく明慧とて念佛のみにて通じ

給ふ一休聞しえし一段の御心入をり念慮にて佛にならせ給へん事はうとがひなれども此所
より愚僧が庵へ御出せらむ何のうとがひなく御出せらむは是よく常道しり給ゆへは苦
もさくうかくさるるき給ひても庵へは御出有なり又かた田舎人がわが庵をたづね來らんに
いか程道にまよひても我等が庵ある上の何れたづね給ふありそのたづねるまでの心苦まきあ
いたがまよひなりと仰られければしかうを何ふても示しぬへと仰られける一休さらう一句て
見まひらせんとて

目まじとちく聲についでまじませ

哲人のごとりをやらんいふふとを悟る其ならひのま先に父母もなくとつと己前の我身の何な
るふとたつともとらふものを知りしとをがむるものもして然の釋迦彌陀によし日のさうず
かたりやさしふものつとつすかたりとまひなれは一眠してとりける此心を見給へと仰られけ
れは御後のははく

さくはらうつらとねはむよははかれて

さまのぬかや佛なるらむ

あぢうばしければ一休よりよびんまひてとまぢうの一首をよみたまひひる

まはとこやこころにかゝる靈敏あぢ

「やのどの、このろく纏ふなきものをさうりをして地ごとくにする
○とへばいふとは終つたぬだるま殿心のうちに向かあるべき

よつとなきぞといふものやうむくつひよひえぬだるま一休

○世中の人のこの佛なれどしやかやあまたのはれはたす哉

しらざるはとけを人もあなまこととてこそ人のまよひとうすれ

○狂樂も地ごとくもまらぬおもひでけうまれぬさきの物となるべし

さくらくも地ごとくもしらぬこゝろめがかうしてけふぞもとの身となる

○人しぬるといなややきもさうづみもしのけておくなると思へばまゝおくならずして魂とい

ふもの來世とやらんへ行あらるろしやえんま王が手に見たりなバ談樂にて作る罪をくろ

うねの帳につけておきて鬼に見せてこれやとの罪人なりかしやくせよと云時

えんま王といふの目なしの、第一の臣下ありすこしをわたくしなふてよく善惡を

らためわかつまり能とをさせばよき事たり又あしじ事をなせばあしき事來るなりはや

きかおそさか其むくいからにかげのーたがふがごとく毛頭をゆるぎすつひきたらすと

いふ事なりこれをくろがねの帳といふ是則人との身もそなはりさるらんくわれさせんの

運運これを名付けてえんま王といふなり

○一休和尚の旦那に狗子佛性の話をさすけ給ひしにこの人狗子とは犬の牙なりふれに佛性とは

何とも合點まるらずと申ければ聞て見給へとて仰られける

犬の子ふあやめる人のしじごまそ

はとけとあれ地ごとくへも入れ

むかひきの、まのころはまた目があかぬ

あつばにまらを入れてころくや

を仰られければいま目があきて狗子のところやうくわかきて候が趙州の有無の處ハ千年

工夫仕候へども愚知の我等は得道仕る事はありがたまと申れれば歌よみてさるるべし此歌を

常に吟じて心得て見られよとて

なしたまへはあーとや人のおもふらん

こたへもする山産の聲

あまといへばあまをや人のおもふらん

ふたへてもなき山ひみの聲

さあうばしければ彼ものしぱうく工夫してしらすば有ともなしともしれぬものにてはなれ

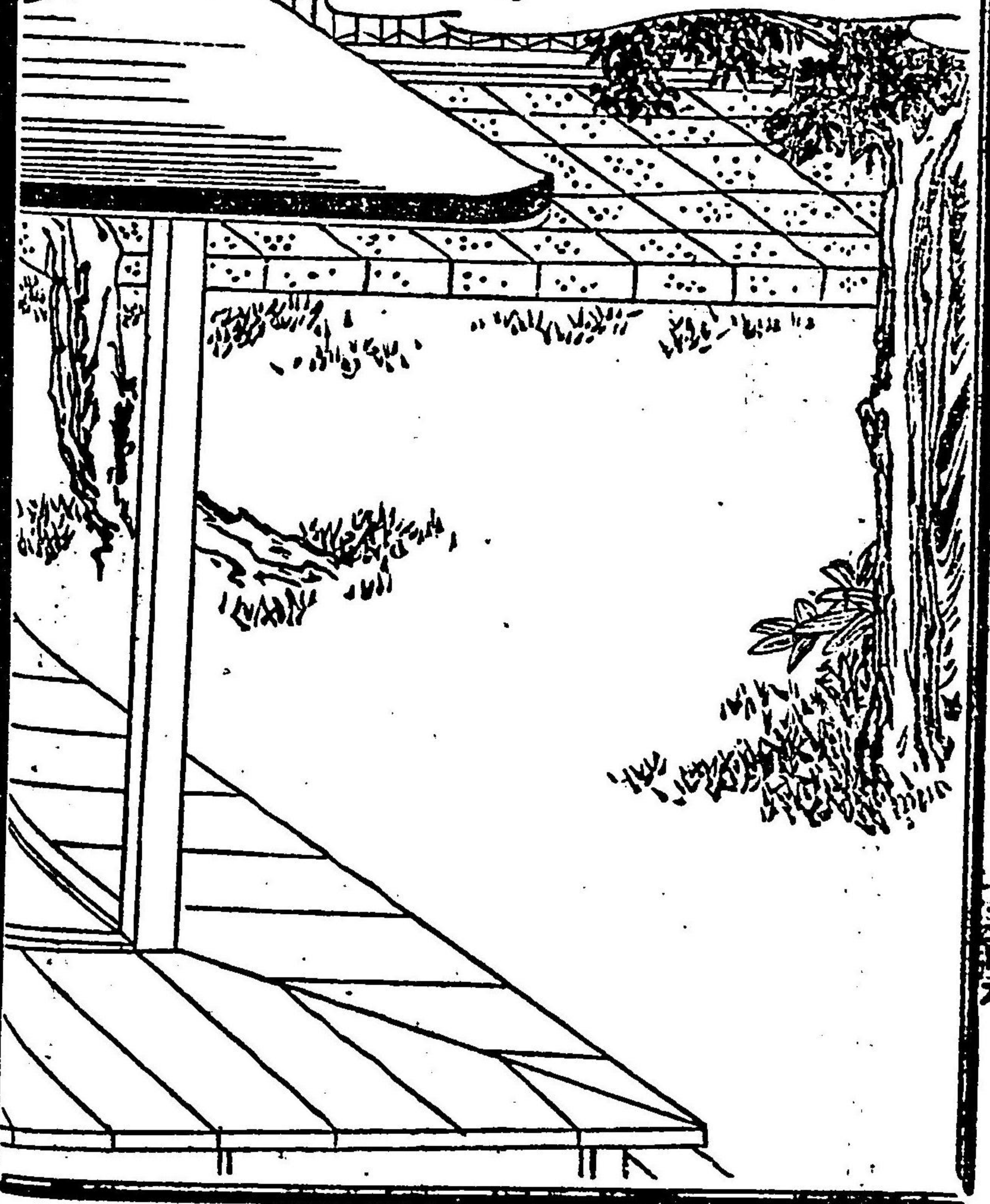
と申ければ

海道の
みまき、
おげも
おりの
うり
りりる

前住正植守

法眼親瑜

墨彦乃
そと
後りる



おの
の
の



有無をのする生死の海のあまをよお

底ぬけてのち有無もたまたま

と仰られければ彼人此うとみて得心して一言

有無ぞしるなふもひけん趙州も

なかりしときの大の一塵

と申されば一休き、んまひてゐつばのま、をくちまひりけるよとてむらひ給へば且那羅弄して廻りけるとなり

○五しきの鬼さのが請とつてうすにてつぎ殺して又みにてひて人のたいとなしてしやさねてつきの重きほをかしくすといふ

五色のぬにとは五羅なりふれを目なしやの、けんぞくあり常に口たくし有ていつつたものなり阿貴といわが心に目をしといふ主人あるをせしらす下人のはたつらものをたのむに使て善しむと何かとうながひかなしとよろこびひら立なきするゆゑに其惡がかの鏡の鏡ふ付るがとくむつてあしき事のみ来るなりこれが則ちかしくなりたゞ多の人の此いたつらもの、下人をたのむによつてくるしみを来るなりたのもこと玉うんをわれとするをいふなりたゞ主人の目さしきのをせしむるがゆゑ也

○またあるもの、いふはの海無んとしてくすりさなるといへば罪のなまきの罪にやなりといふは必の目なしとの罪なる人は殺すやむら目なしなりと知るこれを佛になる人といふなり其人の經念佛無行なきもなきや何の思ひをなきなり經念佛なごも心にかけぬべらつこのおもさの佛ふやならんといふりんさい大脚のいづく造五無間業一方得三解脱と云々五むけんの業を父をころし母をころし佛身より血をいだし和合僧をやぶり經像をやくこれをいふなり父母との天地有無なりとてつと取らるをいぬ佛も經像をももてころしてささるあり解脱といふ一切のまよひまよひひなる、をいぬ也いぬこ、ろの修行の人佛をもとも衆生をさしひ有無ふか、のる内ついで迷ありこれを覺てころして、とさる人を佛に成と説諭ふべし罪のなまきの佛にやなりんといふり

○つくりあつみのしをみほさあるまは

やさけをも鬼をもころすあく人

あんまわうとてゆるす人

○よこものさあんとするふ地とくもとてつとつて

くつろぎをつらてゐるひて

地ごとく身心にまひりてはたの御遊のめづ名也釋迦いろくの經を説るかるゝがゆゑに地
ごくのくるしさをうくるなり

○さて爰に頃しを八月下旬なれば大風大雨しきりにして洛中の宗堂社塔をそこ終ければ嵯川新
右衛門取物もとりあへき一休和尚へ御見舞申て御坊御内に御さるの何とく事れ外なる大風
大雨御寺といつくもろふねささや候やと申なれと一休出合たまひてよくふろ御心付候ものか
な願ふ笑つろしき大風ふて候去まがら當寺の何事も候はずとて
わが宿のはじりもたてはあきもせせ

と仰せられれば其御座ははじりのほさまで候やと申せれば一休むらさき玉ひておれとこと大
事のほどをあらたむねられたりて

おは座の極のたつとておやまな
と仰せられればはじめての御見舞申て御坊御内に御さるの何とく事れ外なる大風
大雨御寺といつくもろふねささや候やと申なれと一休出合たまひてよくふろ御心付候ものか
な願ふ笑つろしき大風ふて候去まがら當寺の何事も候はずとて
わが宿のはじりもたてはあきもせせ



新南門
風雨の
蒼堂と
訪ふ

あまの世であつての主人かりけり

かすてらもつすかゝるもつす

と云ふ給へり新行衛門此哥を讀じて天子よかた留りしやむの御りても得道の徳なることなり
よびて聞かせるが門より立かへりてて一きかてせんつふれ事仰れられたるごめはひ申入
りて腹を打たされりてさだに聞らんと仕候はなはるか、心得申入りて

吠とてつものつものしき風なるか

よのねさかたつらひさなるらん

と申ければそのは、御返すもつもの

吠とてつものつものしき風なるか

よのねさかたつらひさなるらん

と仰られければ新行衛門もめさめらつらつらひして、御返すもつものしき風なるか
○つれを離さ、へさよまなのとはやめしや

はふ心は一休釋迦をたぢふくしめれども我もまたさてもなら事をしふたごさよなせふる
れと經の文字の心をもつて迷ひをしらざる何をもつて此有事をしらんや八萬余經千差萬別
なりとなつても見聞覺知の四門を世をるのうんたをひて水く四門をのなれんるを經の支

學のよく難きを過てみいせよ分別せよとてか爲也一かある下一向の經をすて見聞覺知の

外又佛をもとめばこれ則邪見外道なり人の邪見をめぐさる事をたうれて又一休和尙とつ

からしむなのとつるかたりやと直ふまじ釋迦をかりてせんもなき事をいふたなり法花

經に曰舍利佛云何名諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世一諸佛世尊欲衆生開佛

知見故得清淨一故出現於世云々知見といふ見聞覺知なりて、よ學一て聞覺を不説

聞といふ見聞覺知を則佛即心の光影なりとせしるをいふなり然し見聞覺知の四は一代藏經

の要文なり是をのすて別に修道をし修閑といふことへの迷の人とあしき夢を見てくるし

まかなしむがとくそれのかたもなき事ありと人のいへきも聞入すもし又聞しり顔にして

我今頓に夢さめてくつきに火を得るがとにて萬法たたらかに見るといふそれはいまぶね

ことまで夢ありよくゆめの覺ゆる人のいふの我はじめよりねむらざれば夢あしなんのさ

むるといふ事あらん其とく性徳よよなきとせしるのまじしてかつて得るとなしかくの

くなるを佛知見を聞くといふなりまよひの人は見聞覺知をいなる、といへども一向は捨

て外をもとむりなれずといへば又とてさたりに分別をる今爰に心見よとらす捨すの事

をいふ夢のうちの人よく、只草木て作る土地が森とをいふを見よとらす、といへば

車の音は目をみせ

本來空にいまもとづく

又ある末期とやとんを遊むけるとて人のいへるは

生也死也 死也生也

柳のみさきり 花のくれなひ

柳不緑花不紅 御用心く 一休題

○又ある人一休の御寺へ用事ありて参りけるが夜沙彌小喝食をふまづけて一休の御遊言もさるかみ侍に一々名譽を極めたる事か多かりし申はる自落自棄の御影を拜し侍りし小さうばはゆかよも長髪にして眼をきつと見出しうす赤き衣をぬき丸竹の杖をうつさすにこそをがけ侍りま贊よ

柳の緑花は紅

行田事畢 今日時

折主支子 煖六月雪

虚堂之再來天下老和尚一休宗純末期書

○又ある書家に所持せる自落自棄を拜見せしに是は關川村の柳庵に居まはし頃はや是も強長

くまじまじ卑にかり給ふ山居の御影あり

山居 窮僧 松風

不須 應 薄 徳 山 禪

一箇 住 山 三 十 年

公案 工 夫 了 取 後

長松 風 破 羅 參 眼

虚堂七世龍寶門客東海純

一休老 奇異詩一筆 印

とぞ有けれ見る目もまをましくして身の毛もよたつ事也

○はしなふて雲のうらへはあかるとも

ぐせんの纏をたのまれやせん

きやうを見て其よまめしさをりぬれつ

せん百くともよるくたふなれ

○しやかたはふらたづらもの世を出て

多のひとをまよはせるのな

一休諸國物語

管業とくく僧目なしの、おまひても心なきなり心なきが故に死るといふ也

目なしにふ成得れを愛もかしくも皆目なしにて分て目なしといふ人多き方なし

おまは有やらん無やらんといふなりしつこらふしからぬ事にていふなりあらう

○ありのみもあーとひとつのこのみふてころみふたつのおでひひりなし

あてなもとなき名をかへて思ふふれ見れつひとつのこのとありけり

○おのれをいふつとつらつら不勵めあてまかろうよく無用なりなり

あやまりてふだうをよきとあをあよ其心ころあくまとはなれ

○なれあとのかた見ふ石があるならび五さんの代にちやうまきれかー

人はたゞ五たい五けんふ化さる。五つをさりてりんのみふせよ

○朝つゆりさあのことりを有ぬえしたれかこの世のこりつてー

いなづまのかげにさきたつ身をしれといま見る我にあふ事なし

○あふぬ井にたまらぬ水の波たちてかげもかたちもなれ人そくむ

うたをうたうととじらするうたふるはふれをまとのあるまふとのな

○目みは見て手にとよりれぬ月のうちのかつらのことき君ふそありける

とれつ得ずすまてはやきつ矢のとくひまかへし見よおまはりの月

○萬法を見る人こそ法のあかまきたもつて水を一くちにのみ

四つのうみをたゞ一口のみゆくし今ぞしる。ものさあじひ

○釋迦さんかいの成にまかせて解になるといふしるしなまとかく不明なり死すれば我もなし

人もなしーやかみだも見れはもとの人の悔をうけつ々地獄にぞ入

きんかいとほろくの法を立さまくの行 法戒 行あをする事也死をれを悟の悟れば

とほふ事也ゆるに我もなし人もなしとなりいふ心のをとて後きんかいの法をみればろ

てもなし事なり釋迦彌陀も、とひよく目なしとの成得ずしていろくのきんかいをー

て地こくふいるといふなりたゞ人もふ文字をとり苦行なきさせまじきかためかくいひん

まふなり

○夜もすがら佛の道をたづねれば我が心にうたづ終入ぬる

いかなればたづねてそく山の道をきかたふ安くいららん

○ををひいれは人もわが身も余處ならずころのはかばる。ろなけれど

かへりつ、また立のへりよく見れををふて、ろもそのよころかあ

○心もてびにもころのあれをのささとり何のさとりあらん

あつらぬもころを同じまひなぬあをらぬあをらぬあをらぬ

○何事もなほしき夢とてく物をすめりぬふろをみけつるかき

さめぬればさめぬさだことさめつるにさめぬふろのなきもえならむ

○むか法をいはずもいふぬ春のとなもひらけてちりてつちとよとなれ

春くればさだちる花もとくのりをさかぬは人のあるもあずかし

此本歌は文の終の言葉なり佛の常樂我淨をよめりは一巻の流通なり我とは我淨なり法を
のひらくもちるもつちとなるも皆常樂現前のとよろをいふあり

○一休の詞まゝろさしをふるもひ見るに寒山子の風相にかはる事なし寒山子の詩句に

我心如塞月 秋水清無底

とありしが一休の遺歌に

我ふろそのまゝはとけいさばとけ

なみをのちかれて水のあらばや

さよませたまふれ寒山子の詩の心なり寒山子文珠なりとほひ傳へしが一休の定めて普賢を
るべしされば在雲集に其詩文多しといへどもたいの人の目には見へぬを以て其中より金
づんばの耳へも入らず詩を書ぬさ首の目にも見ぬえらむへきひらかなむてしとてつし子

更も愛へさせ大人にも未だしらぬ人に見せ侍うんとかたみとをのへりみ乎仄平をわきまへず
人の御めやまらをもつて日かあやまるとす我あやまりても苦しからずのくあん出しぬ

一休和尚在詩二十首

題三鉢歌	東四南北自由身	起居動靜似侮人	結句食犬引腰飯	伊勢道心成法師
暈不笠分夜不齒	花後十方淨土春	起居動靜似侮人	結句食犬引腰飯	伊勢道心成法師
孤軍叩罷有向益	花後十方淨土春	起居動靜似侮人	結句食犬引腰飯	伊勢道心成法師
元來有物不離身	起居動靜似侮人	起居動靜似侮人	結句食犬引腰飯	伊勢道心成法師
全無分明明無面目	起居動靜似侮人	起居動靜似侮人	結句食犬引腰飯	伊勢道心成法師
今彼岸欲開鉢	結句食犬引腰飯	結句食犬引腰飯	結句食犬引腰飯	伊勢道心成法師
無彼岸欲開鉢	結句食犬引腰飯	結句食犬引腰飯	結句食犬引腰飯	伊勢道心成法師
無彼岸欲開鉢	結句食犬引腰飯	結句食犬引腰飯	結句食犬引腰飯	伊勢道心成法師
無彼岸欲開鉢	結句食犬引腰飯	結句食犬引腰飯	結句食犬引腰飯	伊勢道心成法師
無彼岸欲開鉢	結句食犬引腰飯	結句食犬引腰飯	結句食犬引腰飯	伊勢道心成法師

一休詩國物語

夜臥寒食思幾千

余身食徑有誰憐

夜深依被半風食

天至曉餉未作眠

一一生忍衆動魚身

八寸推根尙勝人

入道修行若時事

須臾老去革頭巾

元來有口更無言

百億毛頭擲九痕

一切衆生迷途所

十方諸佛出身門

紅顏綠髮冠紗喝

況忘御年十二三

若有貧僧憐愍志

察前吹味致推參

少年其二月如出

一一笑紅顏花似開

無天無地無茶無餅

山僧風流只交字

手看經卷忘兒文珠

定有愁人少年發

高民不泄阿彌陀佛

我無一願

大黑尊天其面合

諸人信仰置柳

善提煩惱後

足下米盡無用心

本^一有^二白^三物^四染^五青^六々^七
 又^八假^九柱^{一〇}思^{一一}出^{一二}事^{一三}
 秋^{一四}手^{一五}名^{一六}八^{一七}鳥^{一八}之^{一九}壇^{二〇}加^{二一}合^{二二}
 一^{二三}有^{二四}恨^{二五}八^{二六}島^{二七}浦^{二八}守^{二九}合^{三〇}
 長^{三一}江^{三二}不^{三三}洗^{三四}英^{三五}雄^{三六}恨^{三七}
 忽^{三八}伸^{三九}左^{四〇}波^{四一}己^{四二}落^{四三}弓^{四四}
 生^{四五}年^{四六}十^{四七}六^{四八}心^{四九}從^{五〇}此^{五一}登^{五二}
 日^{五三}夜^{五四}風^{五五}騰^{五六}戰^{五七}鼓^{五八}聲^{五九}
 平^{六〇}家^{六一}運^{六二}盡^{六三}出^{六四}堅^{六五}城^{六六}
 兵^{六七}法^{六八}遠^{六九}者^{七〇}源^{七一}九^{七二}郎^{七三}
 狼^{七四}藉^{七五}忠^{七六}信^{七七}亡^{七八}菊^{七九}王^{八〇}
 宇^{八一}治^{八二}川^{八三}畔^{八四}飛^{八五}星^{八六}
 日^{八七}本^{八八}晴^{八九}事^{九〇}如^{九一}見^{九二}星^{九三}
 天^{九四}下^{九五}英^{九六}雄^{九七}在^{九八}數^{九九}中^{一〇〇}
 怡^{一〇一}如^{一〇二}初^{一〇三}月^{一〇四}掛^{一〇五}晴^{一〇六}空^{一〇七}
 身^{一〇八}命^{一〇九}碎^{一一〇}珠^{一一一}回^{一一二}馬^{一一三}蹄^{一一四}
 法^{一一五}然^{一一六}應^{一一七}念^{一一八}爾^{一一九}陀^{一二〇}

功^一名^二如^三雲^四宇^五水^六邊^七
 佐^八木^九四^{一〇}郎^{一一}宇^{一二}治^{一三}川^{一四}先^{一五}陣^{一六}
 東^{一七}關^{一八}諸^{一九}將^{二〇}各^{二一}爭^{二二}先^{二三}
 一^{二四}馬^{二五}化^{二六}龍^{二七}何^{二八}若^{二九}穰^{三〇}

一休和尚往生道歌百首

- 阿彌陀佛とこれハ則チ去此不遠まよハハ邊のたしむるもあれ
- 三國の法はこゝろ多くせしやかのをハハみまされむすまを
- 備後道三ツのをしへの別なす善小善報あくと悪報
- むかへより知恵ある人の佛道と二世めんくのをとへさるなる
- 三ごくの世々のうしむき君臣ふいやかのをしへを仰がぬハなし
- 三寶に歸依をる世々のためハハよこく土めんをん土民福樂
- 一心ふまとの道にいる人のうの行をハハ子孫ハハんじよう
- 公家武家のほだい信をる手本ふハハかまより大臣多田の満仲
- 道にいるすまはんじやうの例ハハ藤氏源氏の家めとてしれ
- せんぢやうは忠孝多しとんせいとげれたくひなきわが死ものハハ

- もの、ふのとんせい修行手本として兩行法師さてつくまがへ
- 今も又十編八葉の友がな一ろぎんのむかしをもつれりする
- とんせいと不遇の人のさもあらめ名をばてばたい入のうさんげ
- 大唐の如福神師と樂天のとも念佛座禪とそきく
- 熊谷がとんせいまゆ行功徳みよをんしん平等自他の成佛
- 四大五瀆みなくうにして申ふるまことの念佛座禪とそいふ
- 家ふあり不忠不孝のともからはとんせい修行あやしめりける
- 成佛の異國本朝もろとも宗匠のよらす心ふりよる
- をや主ふ忠や孝ある人々の家にありてもぼだいこのもじ
- 萬法の行のよるすの事あれはこ、ろくに道をつとめよ
- 世をのがれ修行の道へ別でさし智者愚者ともふ座禪念佛
- 貴賤知愚俗男女別あれはぼだいの道へひとつ事あり
- 佛説のぼだいねんの真理ふて二世安樂のをしへありけり
- 善修すれさあく事だたるを恨なよ先世させがう即爲消めつ
- 野人のねはん常樂しうまて生死無常をまげあはれさ

- 應だに定業のがれ給はねのやくいんぐのむくふ事
- 佛姓と不生不滅の物なればまよへ生死法轉とすしれ
- 何事も定業なるといふ人もまことのときをさろきすまらる
- 佛道にさとれといふ何事すいんぐのぼだいを得とくまる也
- よの常に工夫觀念つとめあはまとのときを心うごかじ
- 知恵あるの若も道をつとむるは老てぼだいをしうぬるうめさ
- 人へたゞ平生志願なかりせを修身齊家もいか、あるべき
- 何事もせんせのがうといふ人のぼだいつとめぬこれを猶ぐち
- 我等今悲願祈禱をするをみて有爲の法とてろしる佛陀や
- ふくどくとねがふに來るわさわいのつ、しむるとに入ぬとぞきく
- 一さいけ諸ふつばさつともひぐんのよりぼだいなはんの成就し玉ふ
- 一念の中よりまよふ雲もこりりん系永劫やみちとすある
- つとくとめうりもとむる人それバじひある人の佛をらまし
- 神佛佛みつのとしえをどく人の何れの道もいらぬまをまし
- 一念のじひ眞實すたねとなる九品のれんげひうけこそそれ

- 王の人れぬんぐとばだいらまきちままで五時やくのじみまじくるあつれき
- 戒たもちせんねんまつつとめつ・とひある人の佛ならまし
- 比丘の其身のつしり扱みきぬ人の道心やふるうらめて
- 常來の三會のはるの花もまゝ現世のじひぞたねとあふまし
- 世中に我ろをとると自慢して名利もとむる人のみはさよ
- 正法の花ぞの、山の草や木をむかしのはるとなまよまもかき
- 名と利をまるとむるとのくびんやあ人たつかつれざらいつかわれ
- 今とても天地のみちのかつらねたまつせのりれらばくは願をし
- 財貨は身のあふまりと剛きからあはももとむる必はあなと
- 釋迦も又あみだも・その人子かしのれもかたきは人のあふすや
- あくせんはあふりやすくてまひしんはあてしかたきまものうりける
- 道いたせけんせ外のとこもあてひこんせつの人れたつねよ
- こくろくもなごくもあれあなるなればあふねんあこるあ・ろせはせよ
- わが氣にいたさひ入さる事なぞで人のいさめを用ひしんが
- 人の非のしり受けれきあのが非は智者もせむことあたきとぞ聞

- なにとする人のみあるにさかふる世は佛法のあまきとぞ聞
- 身を入れて身計あものをあひむは釋迦のひんもの修行なりけり
- 真佛は有さう無相にかはらす四相あきふそむさう成けり
- ぼんのみをそくぼだいらすとなすと一ねん廻向のうごにあり
- 賢僧して物とりくろふ沙門ふとこれぞなごくのかきとあうなれ
- 本來のむまん無さうの佛をも五よくにひかればんぶとぞなる
- くられいある沙門をみれば皆人のあうがしやなりといふぞあかしき
- 黙あつてぼんぶと・ろのなかりせつ本よりころのむさう真佛
- いまときの僧の中と俗よりもいんくはばだいをまらぬ佛たう
- 戒たもち座神念佛つとめてもこ・ろあしき造地獄から
- 佛佛道むしぬはたとひ得せずとも生死大事とあもへ人
- 物事に執着せざる心こそ無さう無心の無任なりけり
- 皆人ふるしへの道にまらせなが本來空よかへりこそまれ
- みな人のさんじん々々の思水に三三の川のなはれとあなる
- 住の生死はあなるさうらふ城のあまきとあはるあふさうあ

- 六根に一つあるがらくつらつらと四手の山路の道標をなせる
- たひはたしうき物なるふある里のそらにのふるをいとぬつかまふ
- 種樂の月まつ夜半の念能いくもまりはうよ秋のふま風
- 隣なく本來空にかへることこれや西方往生としれ
- 老の身の月日をかくる所作はたゞ香花にまじりて座禪念佛
- 西方の本來空に往生しむりやう壽徳とあるやめでた
- 口をきけ身の行みのならされわが心にもはぢられする
- わが脚ひるしえの外の宗なるに往生要法よももるかじ
- わが脚ひきふふべき法あふされはるゝるのうちに一もつもなし
- いふしへのちしだのをしへじみとのみらまはなにとてがまんなんや
- まやのさうりたいたけ夫人種樂へふれず佛のわうさせつなう
- 佛生は四大和がうの跡あるに五欲のちりをいか・引けん
- 佛乘をせち辨僧やわる知識世わたるせのとすむかかたし
- 妙にして神あるものつこゝろ觀天地にむんりやまんとする
- 不義にしてあつむんてむんりやまんとするのちた二世の身のみ

○名と利をばかしくつる心引かくてまといつて二世の安ん

- 何とも今日の觀樂すぢぬれを明日のなうすくび流とすめる
- 書寫寺の僕のところもの氣とりむかしの御僧今つこひし
- 現在の苦難修行や種となるかあるを來世安樂のけれ
- をしくなる遊の世界ふ事多しんしん實に慈悲をすす
- 罪障の罪痛ふかさ身取もたゞ座禪念佛題目をよ
- まつしまやみなこの海も種樂の池水と法との陸奥
- 十方は唯一心の淨土なれ衆生もつこめ己身彌陀

己上

興珠は末代まで出世せんと仰られ和尙自の一代にも出世のまじりなれども出世の法結ぶとも名譽あるを書置給ふ和尙号の贈なり自のなまふと座堂の再來ありと其外ふしもある事を書るに給ふ事多し又遺言のふくに我死で百年を過ぎて居士より禪師にたうバ我再來どもはまた二百年にわたる事我死散を土よりやり出し見るべしもしかたぢ朽たらしむ置け中は書くとこれもひて火中すべし大かたの死がらつこねまじとのなまひしとなり然るに百余年

此して隆元來朝なりこれ相違なき隆元和尙ハ一休和尙の再來ある人もまかす御死骸とても定
 てかわり給ふ事あるまじきあり又今の御木像は、るものちの作物ふて諸旦那あるひは弟子衆
 まで一和休尙の御より髪を守袋に納もちけるがかの木像を作り奉るとき御長髪の跡なればと
 て直の御刺髪を御用御髪ふいたるまで佛工か植けるとなりさても刺髪をすまの代の我々拜し奉
 る事有かたかすやさてかく集めぬるに昔の人の言談るも聞たがへるも有べけれども今まは侍
 たな死筆に記したれと猶あやまる事も多から先こは已がゑるうなる故ぞかしゆるし給へ必しも
 古人をそしり給ふべからず此書ハ兒童がひる森の御をちし給はをのづかす耳底のかすともな
 らざるしきかすにもあらざらめかくいふおろかなる我も筆記せるまに／＼にされる心もちりさ
 へひとつ二つは吹へらひ一休和尙のかを成ともどもふがま／＼ふ

鬼の目取みたは何の涙なる。もごくの笠の下がくす度る
 みおけた、力ふぶしに實を入れて。地獄の鬼にまゐて踊るな

平田 止水居士輯
 定 補 正

一休 體國物語

一休 體國物語

一休 體國物語

○一休和尙のまだ若くまじませまき山城御見物のため大徳寺を立出たまひ南山城たきやとい
 う處にいらし給ひ一古き寺一々寺あり寺號願恩庵と申しぬされども此寺入しく絶て住べき
 僧も無ければのづから野子の住家となりてふるき音の壁を閉ぢむぐらは軒ををひつゝ、物
 ずさまぢら有さまなり所のものも集り申るゝのくまであれは候いたゞ住へんといへる
 僧のなきをえおりまかるべき僧もあつゝまねき此寺つゞる申度と彼やこれやと所のもの、つ
 きひ来り申ければ和尙つく／＼と思し召さても風景といひいかふもをしき寺あり我ふあつゝ
 なぞ住るをそへしとのたまへば里人言葉をする文是まで住べきと云る僧達六七人もいろ／＼
 としてすゑ候得とも或の夜のまふ身まひりまたの行術もあくなり種々の何やしは事はかり多
 ければいよ／＼里人とても盡だに行か給事なくあれは候とのたりければ一休つゞるに聞
 て苦しからずいかふも我住るはすべしあたへよと仰ければ里人ども口々にわかれ御僧のい
 らざる事といひける中ふもいや／＼禪僧は若とて年ふよるべし事ふのむすといへる者も
 多りければしからず賃借ふまかすべしとな／＼申ければそふかして御覽ありいかさまし
 卷もの、住すと應ゆるまどてやがて出たまふ在所のものどもみれをき、ていよ／＼これまて

きやしき事の次第をのこす中上さまとく刺まよ、ゆ中せゆもよ、我にまかせよとのみ仰たまひた、ひととすなくと荒つてたる古寺のまいらなるに北夜のすかある燈灯をのみ便にて夜のふけ行をまちたまふそでに子の刻ばかりとみば一きとさき寺のうち震動していなばかりすさまじく鳴かみのとさき音して年の程ハ二八ばかりの女いかふも容顏美麗のすがらにて忽然とあつたれて一休のけろバ近ふ北行よるそのとに和尙すこしも騒ぎたまはす大かた心得たるをうよを去よとのたまへばあとなく消うせぬしバよくありて同じ年ころの兒銚子ウハらけを持そへ夜さむ候酒をき、めたてまつらんとたはふれてけそはふ近ふあゆよよる一休少しもあせうかせんまとすさいせんのものよ又來るかとのたまへば是も同じくきへうせぬとかふをるうちほさなくそでに丑の刻ばかりと覺えき頃寺内ゆるたさむき稻びかりますくすさまじくたけ一丈をりの法師ももてとまうたんを病もの、如きかはにて眠の床をぬりたるの如くたろろしきありさまよひてひよりくと飛光ぐり佛壇の下をしきりにしらとながめたり一休はと御らんじて三度まで來るところあちかなればやく土塵入睡れよとのたまへば早もきまうせぬほどなくるのくと夜もあけ、れば在所のものをも大勢がさるひ合かの寺にきたりてもあか成一休とて定て變化のものふころとれ給とんことのもさんよと念佛を申して一町はあ一歩もたて、よるひより和尙のるり一歩もすあ一休坊やわたらせ給ふかといちうけたり、れ

やうのとき寺の戸ばそをひらき門の外に出たまひければ一渡りあつとかんすつ、しば一はなごもしてまらすさて和尙様をたよりにして曾々寺へ入にける一休のたまひけるはまづ此寺をくづし佛壇の下をふかさ三尺と、一間四方を掘て見よとのたまへば在所のものをも中れるは仰にて候得せも此寺と年久まさと承候殊よ故ある寺のよし申つたへ候得とこぼち中ぎん事いかかと言葉をうろへて申ければ一休聞たまひきほとどしく思わば此寺をくづし其あとにいかかるがうんをも我建立すべしと仰ければさらご仰ふ隨ひ候はんとて人よあひまり寺をくづし佛壇の下を掘て見れとこがねをつめたる三ツツまでやり出しける其金を一つばの地頭へ進上しひとつは所のものをもへ取らせたまひ残る金よて善つくし美つくしたる堂塔を建立したまひまとなり其時より酬恩庵を大徳寺の末寺と定められて此寺ふ一休和尙住せたまふ事とし久しかまける今の世にいたるまで一休和尙の御隠居の寺と申とやしざるによつて御眞跡遺佛靈資あまた有ける山城大和奈良までも眼下小見つたし絶景諸人の目をあさるかま好士もの達きをもいとつ歩をいこび森のはな秋ももああるひの松茸がりあど、て罰をあしけるとかや

地獄の問答の事

○一休かひのくに、しげく御逗留のうち地獄なさいえる高山あり古跡も又多ければ一見の

ために立出たまひけるを所の地頭かねて當話よき事をき、直に聞まはしくわざと口づかの儀
 まはりにてしらぬ恥にて近く行むるひそれなる法師よ地獄極樂のいふを問ひければ一休ま
 なこに角をたて、糞をくらへとのたまひれば地頭をつての外小腹をこてにくき坊主の悪口
 かなものないのせといましめよと下知すればかゝこまつて若輩をも走りよつてきんぐに打
 すへ高手小手ふいまいめければ一休自若として地頭よむかいは是ころ地獄よとのたまへと地頭
 心つきあはて、馬よと飛下り手づかゝ一休のいましめをときてさこそ有がと見御教化かなと
 禱拜し聞わが乗たる馬に一休をのせまゆらせ私宅へともなひ踊り租の珍味をとまへ朝夕と
 ばを離れを馳走いたぐるれば一休これあるまとの極樂なりとのたまひけるとかや

文字御願作の事

○ 休和尙御養生のためとて常に粥をまひりけるところへ長谷川與吉とて小ざかしき男参りあ
 りて御相伴いたしきて〜和尙さまへ此かおに付て御尋申上たき此かおと申と文字は眞
 むき小弓を書き中小米といふ文字を書には子細ころ候わめ我等ふ〜ん至極にぞんじ候ともか
 ゆと申もの水の中へ米を入れしるくやのらかに焚たるをのちと申さればさんさいに米とか
 あるひの食むふ湯あき、よと書んきものにて侍るにいかる子細ふてかやうに尋申やらんと
 尋ければ和尙ふたへて宜く此字は子細こそあれ昔大徳と神農伏魔とて聖王たのしむと其頃迄

はいまは文字定まらず米食なきの文字のあれとも粥とゆふ字なりり〜を伏魔神農其外あまた
 聖賢たちを集めて米を水の中へ入れしるくやのらかに焚てもちおれば腹中と、のひて消やす
 死ものなれとも此文字いまだ定まらずいふ、ふ給るべきやと有ければ何れもあたふをかた
 よけをま〜と思索し玉へきも思ひ出し給の終を案じ口つひて先かゆを焚て人々ふす、
 め玉ひけりされとも誰めつて思ひ出し給のされを神農うつわもの、上に箸をかちと置せ給
 へ小弓のやうに棧の上の箸とのせたる形の如く見えたとてふろとて雨むきに弓を書て中
 夜米を書なりとこゝへ給ふ與吉手を拍て申るの天晴御さんぎくにてましまさいりさよおを
 なき事にての候まじ何を御たつね申上てもちちあげ給ふ御事とて阿々と笑ひたりされ此ふ
 かしきにつけて又不審ころ候へ只今のとくわらふといふ字を竹冠に犬と書ころ心得申すわ
 らふといふ文字口箱にひろがるとの目寫ふ戯なき、社書んき物にて侍らめ竹かむりに犬とい
 ふ字といかある子細にて書申候すと尋れば一休聞しめきて仰けるに是もかゆと一度ふ作
 られたと笑といふ字をたくまんとてなまた聖賢ならひ居給ふ處へ少き犬かしらに籠をかぶり
 てみさげ狂ければ人々一度にきつと笑ひ給ぬ其故にふる右のとよりかく也とのたまひけりい
 かさまいはれを承はればももしろは御事かかとかんじける處を和尙みとまじ〜りと思し召
 懸体文字といふきのり〜よく理をせめたるものにてござる日用にみま〜書ねとならぬ

金といふ文字は中にもよく作りたる文字にて観音經の中にも金銀瑠璃車輪あり、七ツの寶をいひあらへし第一番は金銀といふてある其金銀なれども持へる人があるねば寶といはらぬ依て人といふ字の下小主といふ字をのりて金といふ字に讀を何としようしたるものでなればかぞ仰ければ成程とはいひながら此男も何かなさんをは死たく思ひて和尙さま御尤の仰なご草行てかくときつはかふと人の主に候へとも眞字で書き申と金のやうふかきまされを主といふ字とは少しちがふやうに存ますがいかいぞ申ければされば其不審はあくて叶はぬとふろそこが第一の意のつらところよ一日もなくしてならぬ大切の金なれどもまんで身につかす入ふぬものよと仰られければ扱もくははかなる御たづねを申上一生の寶を得たる事よと悦びてこと歸られ

天動問答の事

○一休常陸の國かーまの宮居一見のため參詣なされけりすてふ御社ちかく歩み給ふにけりたる森の木陰より何ものとも知れず丈々七尺あまりの山伏つと出來り和尙はむかふて佛法はいかはと問ひかけられと胸よわと答給ふぞらつ割て見んとて氷の如くある刀をおきて必もと買ひあてけるに一休すまじもまらさ給ひす

善とふさや吉野の山伏つら

木をわりて見よ花のちりあを

と古歌を詠じ給ひられと變化のもの恐る、けしきよて何方ともなく消うせぬともめでん歌歌ころされ

輕口問答の事

○甲斐の國へ一休御下向のとき所の某の侍て一休の答話よきを聞たよびし故一休の頓作をまのあたり聞んと思ひめしつらひの意よちしあひひけるふり和尙こ、を淨通りのとき生懸座のときいがんと申せ和尙なれとか言何あらんと思といふて立されよといひぬくり敷けれとも聞なれぬ言葉なれと覺つとき現ふ見ゆけるゆゑかさねてはひたのせけるには生の字とまよざいふ字なる予懸座のいをもをいんととねたるものと覺へよとねんころにをしえおき一和の御通ををわそしと待たる所へ和尙何心なく通り給ふをかの童かけ出てなまのいもの時いかんと、ふ一休取あへ申表てもよし焼てもよしと仰られをしえのとく聞といふ一休ふとつてまぐひかと有ければ某どのをかしき中に頓作ある事を感じられけるとかや

懸川秀句問答

○一休ひえい山に登り給ふとき懸川新右衛門といふもの御供中されける折かゞ彼山へか、りして頃和尙さまへ中上たき句ぬとすかゝ候間中て見候はん御付被下よとて

ひえの山路をみるひもくかな

といひもつてぬに

さしきけてふもさ小四貫の錢をとりり

とつれ給ふかくいちはやき御願作にてぞありけるそれより山ふのはり給ひて種々の討取あり
たこ、に略を

一文や二もん何と思ふなよ阿彌陀も錢て光る世中

金持を十人よせてながむれの中に五人と無學文盲

一 休 川

赤飯の答話の事

○一休和尚したまき在家へ御出ありしと先折ふし到來せまきて強飯を奉りけるが亭主こびたる
ものみて茶て和尙の答話をこゝろ見んと思ふ折かよ是幸ひと出一けるふ遠慮もなく手づから
よきりての喰ひ極りてはくひ好物のよゝみてしつゝ、か召上られたるを扱こそよき折かよとて
和尙さませきかんなれさむささは駒の通るまじき夜とよつにまゐるのいかんといふ一休とぞ
さぬ風情みてひんものまひりたるに亭主したりふ一句なくしてまゐるにせんまゐるに
とせめければ其時和尙答へ給ひけるはこれ見られはせきばを聞かしたるきりかたの手形
のよて通すはさむらゝてても難る也を知れば亭主も理に折てあたれりて赤飯を他より

さしきけてふもさ小四貫の錢をとりり

赤飯の答話の事

○一休の御寺へ日頃御出入申ける百番あるものたゞ一向の彌陀の淨土に生れん事を願ふこと
ふか、りしものありしかざるはかに當時の名僧とまきけと八宗九宗のへだてなく足をとよま
てなしたなたこゑたへ参りつゝ、極樂淨土に生せん事の妙法のまに日をくらしけるあるとき一
一休和尚の御寺へ参り申れるのうれかしは極ましく愚痴暗昧の身と生れ候へどもたまちがたき
佛性を具し申上はいのやうにも修行仕り來世のかならず極樂國へうまれ申たくとみんじ申す
誓願ふかく候去によつて四方の能化たちへ参りてはうけ給り候に他の師は十萬八千里のとを
きまなこ極樂ありとをしえ給ふに一休さまよと地獄ごくよく目前にありとしめし給ふ遠き
道のほかに候得ば百里や二百里のちがひも有まじき候へぬさもかやうに大相違あるによ
と某まよひ申候間あはれ此上の御じひに實を示ま給とまきたをながしくとまきける和尙聞し
あしはれば迷執ふかきもの、爲すの十萬億土と説た悟了通徹のものには目前と説き御經を
去此不遠とあるのこゝありぬさのたが俗かされて申れるにかやうよ丁寧に御まめしを承
り候へども終に七寶莊嚴の極樂しかはさ尋ね申ても見ゆる事なく候はき候とてもの御慈悲に
今一句ねんごうに御示しふまづかり度ごう候へとらふ一休さまとまきされさぶら極樂目前

身好といふの七夜さうごんのあたちちるにのみちり人の為に口説てしめす極樂小あす人
 己に言句をはなれて語り得せんはまる事なまじりし坐禪工夫まで見付よと仰られけれ
 ば悉くなして家にかえり襖をかぶり晝夜まんじ暮れ明して不斗あつたしくも和尙の寺へ
 参りため思をつきさてし目前の極楽くみを見付候へとてさても多の衆生の迷ひを知らざる
 ころ不便の事に候へ此度こそ悟とひつけて候とて笑をふくも小おきりして巾ける一休聞てさ
 ごとあうめて、ろの面目だふひらけな何のうたがひか有べれ子去ながら其方の明らめやう
 いかんと、ひ給へばされつゝ此極樂の中は貴賤富貴にもよらず老若男女の隔もなく朝夕
 まうりふある事に候といふ和尙打うなづれもつともくよれ心得かきさて其極樂に朝夕安坐
 したる心はいかんと問たまへとされと共事にて候美食蔬飯にかきらす朝夕のこくを樂しみに
 たふる所こそ極樂にて候よととも目慢らしくとうめん作りて申ければ一休も手をうつてわら
 ひ給ひけるとかや

俗より弟子を頼れ給ふ事

○一休の旦那にをろかななる者ありける此者振々まかりて御物にたすを承りたる故あるとて一子
 出家すれば九族天に生ずるといふ法語をうけ給ひりて深くしんじ只ひとりの子をもちたるが
 處小兒を御弟子にまき下さぬ候とある事奉りける易き事ありとて直さや髪をろり落し小僧

とあしか一子を御手にてさらしなてまわし給へば親の何ぞ有難き御引導もあるべきと耳
 をままりて問居たるふ和尙作り辱してきんになれく牛のきんふなれく三さんまでのた
 まひければ親族に相違し大に腹立して是と曲もない事とのたまふものな佛やでの侍なす
 とも齋屋になれとなりとも定てありおたき御引導も有べきとんじの外なる牛の陰翳ふなつ
 て何の益か候ぞやとて一休をしきりふ白眼ける其とき和尙うちわうひ給ひてされば末法の出
 家に行ひ難くして落やすしきるほとに牛のきんはぶらくと落さうふ見おれとを一生落たる
 ためしなしざるによつて斯にいふなりと仰ければ彼旦那何と心づきけんいれを承れば面
 白ありがたく候とて一子を連て歸られける

天の笠を着給ふ事

○關東より一休御上京の折かゝ然るべき大名と受まきものどめとよなり先になりて登らせ給ふ
 頃一も水無月のやへつつかたなれば暑氣はなれたしかりしあせも笠をも免さず歩行給ふかの
 名もこゝろやさし地方にて使をもつて申されけるのゝ、る炭天に御坊のちと笠をめさゝるや
 幸ふ持し合せたる古笠候もまこれを着せられよとて笠一かひご一出させれば一休も禮を正
 しくして宜ひけると御心ざりのは近頃祝者申て候しから此法師と天をかさに着し候
 つまづつてもぬるくも候はずとのたまふ使の者たちかへりかくと主人に申上げれば大名もい

かさま此坊主たる人ふてはなきぞとて必す馬のけぢめもかけぬやう日暮をよきて通せよとて
 猶も同道申れるとて留りの宿をも御がまひなく同宿し給へと申つかへしける故程も暮よ及
 びぬれバ同じ宿に泊り給ふ其夜かの大名の御方より使をもつて申送られけるは翌のほき笠を
 参らせんと申たる者ふて候族の物うきものにて候とに此ころの曇とよきもそつかれさせ給
 ん御酒一献まらせんふあへ入らせ給へと有けれバ一休過分の御事ありとて使を察内にて
 行せ給ふとて奥の間へ通り給へと大名聲をかけ給ひていかに御坊よ和國のならひ人よ逢とき
 よ笠をぬぐとふる承るふなふとて笠はぬがせ給はぬぞと申されける言葉の下よとぬきてもか
 けるくべき威なく候とのたまひける扱ころ一休和尚よとすいし参らせよと種御ちとふ
 申されけるとかや其席さまくのおもしろき問答なき有つれども聞もらしぬ

稚児時御引導し給ふ事

○一休いまた目すか十歳の御とき師の長老田舎へ行給ひ御留主の處へ旦那うち相つてたるも
 のありはうき御引導下度より使申來せけれと御他行ふて候へり御歸りの日限もしれざるよ
 ま御答ありしよと候へり御弟子がたにても苦しからず是非々々をわして願ひ早死人を寺へ身
 込みける折ふしむとなすの弟子も居あはせざりけれバ一休とせしやう氣に用意して棺
 向ひて死人をゆひさまた次返りて身をぬひたま又兩手をひろげて何のこと業もなき囁とぞの

まひけるか、る折から長老の御ふかあり來給ひて物かびより此有さまを見給ひのち此引導の
 いかなる事すと語りけれバ一休申けるはせん候死人をゆひさしたるは汝が死たるゆゑにと申
 事それがしを指さし、と此小僧ふと申事ふて兩手をひろげたるは大なる恥を我にか、せしる
 事と申たる事にて候也とこたへ給ふとなり

泉州堺よて遊女と問答の事

○一休和尚さのみ浦に御越りしとき其處ふ旅客を宿する家屋のうぢに地獄といふ遊女の
 と此ものゝねて一休和尚の名高きをしり一首を誦し奉る

山居せよ深山の奥に住るよかまこ、は浮世のさかひ近きよ
 一休其ま、御返歌

一休が身をば身はきに思は給ハ市も山家も同じ住家よ
 と返歌し給へとをこいつたやあらぬ者とあはしめしめたりの人ふいかなる女と尋給へばあ
 れこそ音小聞へし地獄と申遊女なるよし申けれバ和尚其ま、
 聞しより見てみころしき地獄のま

と遊しければ遊女とりあはず

まよくる人のおちびるのあて

一休 諸國 物語

かこたあひるさかや

○ 乞食に小袖を給ふ事

○ 一休極月の末つかた東山よし田さいへる所へ御越なされなるかへるさに今出川口の河原に丸裸なる乞食の伏し居たりけるを御らんきてさても不便の者やとみぼしめし御小袖を一重ぬぎて取らせらるゝに此乞食よろふおけしはなく袖うち通じきたりける一休仰けるは扱をふしぎなる乞食故一錢ふもいゝき伏るがむの乞食のならひあるによろふおけしきもみへざるは痛しくもあもへざるかとひ給へば乞食こゝへて申なるは御身はわれに小袖をくれてうれしくも思ひざるかとこたへけれバ一休手をうち扱をあやまつゝり一大事のささりこゝなりけるやのささま此乞がひ人はこゝ人ふとよもあまじ愚僧の愚痴をはらしぬるころうれしけれとてこまごころを合せ目をふさぎてたぐみ給あ其うちにかの乞食は消うせけん小袖バかり獲りける不思議なりぬる事とかや

大和峯の薬師御利生の事

○ みのの薬師の靈馬あらたなる御佛にて願ひあるもあふざるも参詣の人たへさけけるあるとき瘡を病る人あきて七々日のあひたはだし参りの願ひを立て毎日くをこりきくまうをふるすでふ四十余日に及べざるも其しるしあかりければ如來を恨たてまつりてせんくは悪口ま

ける折から一休和尙の御下りと聞しよとほとき御迎ひよ出てしかくのよし中上げれば和尙聞し召し仰けるは如來のれいげん無にはあふすゝんなんちが身を恨むべしさりながら我のり見んとて狂哥一首あそばし薬師へ今げんまうで、此うたをよむしこのたまひれば病人よろこびいろを参りけるが頃しも五月中の二日されば貴賤群衆の中ふるひは現世安穩後生極樂といのるもあり又南無藥師留連光によよいかれを助け給へこれをすくひ給へなご、口々にの、しれバ物をわがくして心定かあうすしバらくと内院ふ入て人のしづまるをまちけるがやうく深更におよべとみあ人下向して燈明の法師と病る人をとかり成ければ件のうたを出しつゝ、しんでよとあげたり

南無やくし諸病悉除の願なれば

身よりはとんの名こそをまねれ

きよももつてぬに内院よりれたかき御聲ふして

むらさきつゝ一肘のものぞかま

あのみのかさそふふぬぎあけ

と聞へけり有がなき佛勅やとしばらく禮拜してたち上り見れば身のかたをさびてあたまを病る人存すいに通りておく思ひすくふ慈心して諸病悉行に出ひるとかや

一休衆道くるひの事

○和尙の衆道すきふてまじくして兄かつぶさへの能書こゝかまこふ有といへりされと御心の動
は給はざる事ハ駿河の府中よ小玉辨之助とて鄙よ、びなき美流ありけるに和尙ふかく口説給
へともしたがりさりければ狂歌をむくり給ひける

花の根に鳥のふるすにかへれども

人のわかきふかへることまじ

とぞありにて小辨のまゐる都がたのづくにうと書てつかはされければ御哥のころに取
けんしみくくと御返事ア上てきあへち其夜まゐりて御のぞみに随ひ申さんと申上ければ和尙
うなづきよくころ来りたり今朝までさふと思ひしが今のもや用事もなしとて歸し給ひける
とがや

傾城に御引導の事

○赤坂の宿にいつきといへる名高は遊女ありけるがしをらくの病ひにて身まかりけりしたし
ものども集りて申けるのうれ女は五障三従の罪ふかきにまして流れの身なれば大かたにては
かきふまじいざや一休和尙を頼みてまつりて用とんと御旅宿へ参りかく罪ふかき女にて
候御なごけに御引導をしくだされ候へりてがたくふる候のめとひたすらねがひければ一休

やまき事にてまごふかるといし其來にいたし御引導せしむる

僧は衣を賣り女の紅をうる柳のみせり花をくれぬ

喝どのたまひければ棺のうちより光明かやくと見へしは刺さへ身夜に日とろいたしくまじ
たる者どもの夢ふ成佛とげくるよきを告げるとなり又同所 煎茶を往來の旅客にうけて世
のいとなみとせし男ありしが病もなくして願死なごるを近きあたりの者どもより集り水なご
とろくさ氣つけなき香せけれども更に其甲斐なかりしか折ふし一休御通りありけるを幸ひ
の事とて其よま申上御引導を願ひなれば

一ふく一せん一期の間末期の一句雲客の話

喝と御引導ありなるが是も往生をとびたりと恥しきふあたりの者の夢ふ見えけると也

大食の御咄しの事

○或とき殊外大ふうを以ふ男有けるが一休和尙の御相伴の非時を給りなるが和尙の仰けるのさ
ても其方はめづらしき大食かなとのたまひければとかの男いや是とたふると申やごにてはさく
候葉が若き夜ごちより合かけろくいたまたるとき餅米煮斗つかせ我等一人して食それさもい
まは食くらざりければあたり小菓もちいた、か有けるゆえそれをも種らず喰盡したるにさ
りて願ふくれざるにより河邊へ走り行大なる舟あるを見るより其舟を横にもちて川水をせき

一休諸國物語 拾遺

と必申たりと首ふりてかたりれば一休聞えしとてもたびたゞしき大食かなるればその大
 食のめづらまゝ去ながら恐僧が予ん玄たる山伏ありしがまれも大食人にてかけ録して餅米二
 斗をつかせてそれを一人して寝らせくつみ余りに腹ふくれける小や廣き松原へはしり出で三
 かへさかりの松の木を捻折てこしをかけ休みける所へ少なき蛇の大ある蛙をのみくるじげ
 に見えしが出きたりかたはすの見なれざる草を喰けるふぢとくと腹へまたり山伏ふれを見
 てさてよき事を見付たる物かなとくだんの草を取て喰けるが速のつぎふるふやこのくさ人の
 消る草にて山伏は忽死へて二斗の餅と、きんず、かけずら貝金剛杖なき餅にもたれたるどか
 たと給へば彼男顔色をかへて取入早し歸りて其のち二たびまるらざりけるとのや惣じて狂が
 る空言のいりざるもの也の男の大ふうをいましめ玉ふ處也

化物御退治の事

○北國方へ御雲水ありしときある古き宮に大ある石燈籠のあてけるがいつくさもなく毎そん燈
 明をとぼしけるが其燈籠のかたひらを大の法師毎夜ぐるぐくと廻りけると人皆これを見て
 恐れずとゆふものなくされとも又難あつて見とくんとゆふものなかりけと一休これを聞し
 爰し拙僧今よひこれを退治すべしとのたまふに所のものとも大によろこび日の暮る、を待か
 ねくだんの所へ行て見るに其夜もたがのす燈籠をめぐるとかき車をまはまがとく昔人申ける

たさて一休房がたゞと有べき由のたまひしかとも中々そのしるしもなき事と、りり〜評判
 なを所へ又法師一人あらわれて其夜の二人のせめぐるはとよ昔人いよく〜恐れをなして歸り
 しが翌日宿るを待て一休の宿所へまわり御房の御口とは相違して昨夜は化物の又一人ふへ
 て中々鎮るけし見え申さずといふに一休聞玉ひ其一人は拙僧にて夜もそから退かけ廻つ
 めに化物の踏割まけるはさにもいや今夜よりの出まじれと化物の報言をたてけるによその
 るし遣たり心易かれ今夜よと出る事あつしと示玉ふたしてそれよりは何の怪しきもあか
 りけるとかやふ〜さも世ふあるとなり

豆の秀句の事

○一休和尚のいたつての輕口にてまじませばある地頭の方御中越えあつて何とぞ御咄一承
 身度よし和尚聞しめし何より安き御事とて早速まわり玉へ上臈ち居ならひて聞玉ふに和
 尚まづ佛説を切口上にて御物がたりありけれを上う衆感に堪かね御教化の御のあし有がた
 く候得ども余りみじかくて本意をしねがひくひなかく〜と退屈する迄御物がたりあれかしと
 申されければ一休どもかうも望にまのきべ兒幸ひはあ〜ころ候へ拙僧さる方へ夜咄まに参り
 けるにいり豆を菓子に出しけるがかたひらよりこの豆秀句となしたべんといふ皆尤もとてま
 めの子のまゆなやうふなと口々に申す中に野こくもなく見ゆる人出て申ざる、には奥さまの



よしの参りとしてした、かつのみで噴ふものあり人を聞てこれはいかよ豆の秀句ふくきまの
 よし野参りとして心得ずいかふく〜とせむれとさてハ御子んじなきにや井の内の蛇大海を知り
 ぬらめしありいづれも御ぞんじのさふで當春うれし頼たる人の奥さまよし野へ参り玉ふに
 御供してまめとしに道すがら名所舊跡うちながめさほの川邊井出の里玉水なごやうの名所つ
 ぶさふ見物までほごあく吉野にも成ぬれば山ごさなかつ雪かき見まがふをかりあり神社ふつ
 かく獲らすめぐりをがみ夫より高き所ふのぼりて四方をうちながめ給ふ所にはかに嵐ふき來
 て奥さまのぬり笠を谷底へ吹をさしける其ときるれがし深見淵にのぞむがとく御兒氷をふむ
 心地して縁をいとぬてついに取て歸りぬされども笠は少しはげたるをふくさまほらんぞてさ
 てもうこの事かなごのたまひしそれより立田法隆寺奈良初祖寺なごいふ名所三ツ山たるま
 じたるまなごやうの舊跡見物あつて御上京ありしとよろへ御一門の御女中の見まひ被成
 けるにさもじんじやうなるぬり笠をぬいていづれもけ越えりひりつれにつけて思し召出さ
 れ彼はげたるをぬらせよと仰ありけるはさだに法師屋へあつらゆれば銀三錢目にてぬらんと申
 ず奥さま叫一召てそれハ六かき事かなごら手ぬりふせよとてうるま歸へ島目二だをもち
 てうるしをぬめけるふむくろじ程ありなるを惣じて奥さまは物事をびだ、しくのさふふを
 ぬら少しとかな豆つぶはをりとのたまひぬるとこそ豆の秀句は三國一のことかとじまん

らしく申されたりとかたり給へと上臈兼退屈して色むるく成はひり

國司へ下帯を遣はさる事

○或御大名の家中に片岡彌太夫といふ浪人か宅に一休ましましけるを此所の地頭き、つけて使
 者をもつて申上げるハ長の旅ふつづのれなざるべく見ぐるしく候へとも私宅へも御入來あま
 て御うさを晴し給へかしと申つものしれれを和尙よくこころ御まねき添けなしとて使者と、も
 地頭の宅へ参り給へハ地頭も本意にや思ひんんさま〜御ちさう申上てさて何ふても御手
 跡をくだされ度と乞ければ一休やを死事あり旅宿へ歸としてし、め進ずへまご約束し程なく
 彌太夫が方へ歸り給ふ引ついで使者さ〜り先は御契約申さる御手跡此ものへ下さるへ
 くといひきされれば和尙もあまりせハしうや覺じけん彌太夫の書きたる文のありしを使者に
 わたし給ふ使者よろふび持かへりて主人に渡しける則ひらきみれば見知さる彌太夫が手跡な
 り是はふしき成とかな使の誤りふてよろざるゆめと使の者を尋ねれとも直々御手より給へと
 していふにさてハ餘りふいとぎて申たる故御取ちがひありしものばやと又も使をもつて最前
 下されしハ彌太夫が手跡と見え申候願ハくは御自身にか、せ玉ふをこころのぞこふハ候へと申
 つかのしけれと一休うあづき左ふとに深く御望をらハいかをまま申入きとし、かに包た
 る袋をよろむたされなる使者もち歸りて主人に渡し給へとやがて袋をひらき見れさごもよとれた

る古下帯にてどまりけるが地頭ものも手をうちて笑ひける其のち又も御入の折ふし柳とばかりの大文字にて一字かきて送り給ひぬ又ふるき屏風は何ともかちの知れぬ繪ありけり古く成候て見分申さず私親ともが申つるふの馬をや牛とかやらんにて御座候よし申さるれば和尙牛ならん角あるべし角なければ馬あるべきとのまふ亭主申されけるに御筆の次手此繪にも詔をあらばし下されよと申されければ易きととのたまひて大文字にて馬じやげなと予辨ける其繪今にありていともめで度御藏にふさまりて寶物の其一ツとぞ成たるとや

長咄も退屈せしもの、事

○さて和尙さま先夜の御のなしはるもしろく候へともあまり長を御はなしゆえたいくつ仕候何と予今夕のじかきありがたきとわれくさもにても口かき安き御咄しを御聞せ下されたしと一座のものとも御願申上げれば一休いかにもよきありあり昔き、やれや日本のあるかから天竺までもこの上もないありがたきもの飯と汁煮やびや何と皆口かつたかくくを仰ふれた

大俗問答の事

○ある時出入の下男と、ろに思ひけるふは此寺の一休さまを今までの知識者として昔々たづねて見ゆるが御答とやらんを聞に何でもない事いふて御答として聞らる、我等も和尙ともしんどう

心て見んとふと思ひ付て和尙さまに御尋ね申す男と申ものは生れ出るより珍寶と申ものを以て出ますが夫を成人まで落す人は是如何と申ければ未だ言落をひかぬ、金玉と断とも無きかど一

兩眼の多たらかなるを持たが女ふあへを目なしと予ある
女房に辨才天とさうつくしい美人といふも皮のとさ

子の貧なりとの事

○一休の御寺へ常々御心易く参りたる百姓の元より家貧しきうへに子多くもちて其日も過しがたき程のものとして有けるが和尙のもとへ参りさて、私ともはいか成因果にて候哉御せん十の如く子をも追々出来まして當年二才ふ成を下として都合十二人まで出来まし其中にひと子もござります私夫婦のものに日に三度の飯さへ腹に足らず下された事とてもなく是がまこの子の地獄へちたれと申ものかぞ子んと弁れば夫ならばこの子が憎と申ものもござりませぬ又かやうの貧家へ生れくる子供も不仕合かとおもへばいよく不便にもぞんじます是も前生の心くひにて候哉御聞せ下されよと言ければ和尙うらうあづき尤くさるがら下の子はいまだニンとみいやれやまたくいくたり生まうやらしれぬかあらず夫婦のもの、氣をつたぬやふにして有るときにはひとつ處へより麻酒でものを氣をばらし仕込では出かしくする

かよはと仰られればびつくりして和尙さま此上出来ましたら夫婦の者何と成ませうと申けれ
 ばされは夫に付てのましがある昔奈良の都の頃白木の長者とて日本にたれしらぬものもなき
 大百姓があれたげなきがうのとありふ丁度そなたの様な貧家小種腹ひとつふて十八人の子を
 つて今其方の申さる、通り親ふたりの正月元日より大晦日まで食の足としらす隣の百姓の
 事をうらやみ居けるがある時夏炎天に大勢をあつめ妻をふみかゝるのうち元より門外まで
 ふも干ひろげたるに貧者は其妻を見るに付ても此干たる妻をしろ十八まい交あるならは子供
 に一枚づ、富里かちるバ我等夫婦が此苦しみを有まじきと思ふ事をもうす子供等のあしふ
 まかせてあそび歩行て目のとく所に一人も居ぬとよと思ふ折からわかき空かき曇り大
 雷なりはと光き大夕だちふりきとり大道 忽 大河のとくなりて件の干たる妻なかく取入
 き間もあく殘らずあがしたるが隣の夫婦は門口へ出ていかせんと思ふ所へあちこちらよ
 り走り歸りけるも頭のかすを肩見れば一人も不足なく剩格 別身をもぬきさぐりける依て
 昔より子さもは寶じやといふ程に出かじやれく其長者といへる大和國十市郡天の香具山
 の東北ふきこし高き岡山を長者やしきといひまた其わきに白木塚とも磐塚ともいへる塚あり
 是の其時の長者主人の元より家内出入のものまで一飯とに其のしを捨てふた、ひ川ひされば其
 瘠たる磐しせんと山となりしとて苦つかさといひて今にあり又佛説の中にも鬼子母神と云るの

三千人の子を持ぬふ其うち一人を隠され夜爰と成ぬふと云る事も有りてとて哥讀てぬかりけ
 親となり子と成くるも今ならず二世も三世も尽ぬ契かすもあき子を賣人もありと聞く
 親でとなふて息の再來親は過去わが身は現世子は未來後生大事と子を育てよ
 ハッ橋にて狂歌の事

○参河の國ハッ橋の名にしるふ名所にてそのかみ葉平もかきつづくの五文字を句の上にかきて
 歌よまれけるとかや一休ふもいかざる名所かや御覽さされたくや思召けんともろの里人にお
 んないさせて御らんするふハッ橋はなれてかたつばたもなくとこそせまらまて田さうさて
 ぱいづれをやつしとも見もわかぬていまりけれと
 むとにきく三河にかなしハッ橋も
 田ばかりありてかたつ葉たなし

とあらうばされなるとかや

龜甲の曲遊の事

○一休和尚御手まへ拂底のじふんにて有けん一條もとりは一の辻ふ高札を立られける
 一此度日本老和尚一休三明六通を得て龜甲をひつくり返を望の方に見ぶつ可有
 者也 今月今日よりひじめ申候

と遊ばざれて紫野に芝居をのみまへ玉ひける事とて言ひやしなれば京わづんへ老若男女貴賤貧
 富をわかず足を空ふあして群集をなし芝居もすみぬれどさらば時分はよきとて一休は用意あ
 り伊衣のまへ小大ひなる瓢箪をぶらりノと付たまひ両手にバチを持って西より東ひんがーよ
 り北北より南と飛免ぐりは糸のへとあんと幾度もなしまひ大音をあげんひやうーく
 とて二十けんばかりまのりのねまわるとなとし玉ひて其後樂屋へのしりり自身は大鼓をう
 ち給ひ是が、はりくとして残らず追出したまふ見物のものとも是はいか成事予とて狂がるも
 ありあるひの今にはじめぬ和尙のあどけ談としはらくは口も得意がぬ者を多ありけりとかや
 浪人引立ちありし事

○一とらく甲斐の國にとうりうのうち一人の浪人伊出り申るが一体さまの生佛ふてまじ
 ますよし國中みなく申事に候へど何卒我がみの不自由なるをたのみ奉て身上にあり付候や
 う偏にたす給へどてひとすら願ひければ和尙もふびんと思し召され一門にてもなきやと
 かせ給へん某が一門歴々まかりられども尾羽うちがらしぬれば恥かしくして参り得ず且は路
 限のよすがもあく不自由にて迷惑申す身にて候あつれ和尙さまのほかげふて身体に有つき申
 度よしひたすら頼上げれば和尙うちうまづぎのたまひけるの其方藝能のあにを得たるや浪人
 答へて萬事不關法に候と申上るいやーれきーの果とあれば禮樂射御書數のうち一々もひ

折立てとみたまふとも一つとじて存せぬよし申上げれば浪人あたる御遊とにがくし
 しくしバく思案し給ひけるに彼浪人中あの外にぞんじたる事なく候へども故あつて教盛の舞
 一番予んじて候といふに一体きこえ失して夫社日本一の事よとのたまひしみくーと内談遊し
 て不便よりするものをかゝらひ其外鼓打などをよびあつめ天晴云合せあり芝居にまくを打こ
 ーかーこに高札をたて給ひける

一此度上方より幸若罷下勸進能仕勸進元ハ日本老和尙一和

と遊されしかバ侍はいふに及ばず町人百姓五里七里を以とハす貴賤群集してさる廣き芝居よ
 小屋も破る、はぢ小見へたる所へかの浪人しやうぞくつけ氣だのく身づくろひして舞臺へ出
 てあつもりを一番舞すまして樂屋へ入とひととしく一人の男出てまこと御歴々様御入御見物
 のだん有がたたきといんさんに一禮をのへきて此つきに何をかまはせ申さん御このみ次給
 と申ければ多勢のけんぶつ口々に大職くはんよいや高だちよ消しげよなと、思ひくーに言は
 せしけるところへ兼ていひ合せありけん五七人のあぶれ者ともこ、かこよりをどり出てい
 や外の舞ハ見たくなーあつもりを舞せよといふ、れたる男同老舞ハ舞たいくつ小候はんとい
 へさかのあぶれもの共いや我らがすきじや教盛を舞さずんと芝居を踏くだかんはやつかみひ
 じがんさや、いふはさかに又教盛を舞ひしける、舞はさ、又前の男出て口上をふれければ又

隠れもの出てはやあつてもといふまゝ、よつ、なで四五番まではせける其後はまづ今日御いと
まごひとて退出し木戸口よて明日と取かへ持ちんに入る、評判とふれければ前の日より人を
ハ多く入ぬ御定のあつもり一はん舞ハし次はといへば又前日の如くかねて仕ぐみたる事なれ
さ幾へんにてもあつもりよと七日までこそ仕とりける彼浪人たよりを得て一庵の身上となり
けるとかや所の地頭の耳にも入ぬれ共一休の事なればとて御しかりもなかりけると也

文鏡の御咄一の事

○ある人間ていへく和尙さま通賢の中より裏に文の字を書たる鏡の候ハいか成子細にて候哉とた
づねければされとの事よむかしハ亂國多くして親をうゝみひ子をとづね我が身の住家を定か
ならずして森食もむすれ中々數の衣をかさね着といふとならざりしと聞一小中むかしのころ
よとありがこ兒聖君の御代をあり御治世ながく百姓町入ハハふに及ハず下賤の民まで日
に増しむとりに長じ亂國とやらハ軍書でよむさかり子ども耳には聞のみふて衣食住の三ツ
をばしいまゝふ美を盡し善尽す世代がかりしとき、しが其時御上様の御目にあり萬民のう
れひ遠からざる甚とあるへしと御意をくるまめ給ひし折から鏡を鑄まし廣く日本中へ出し給
ふ印に文の字を書せ給ふうれハいかにといふに鏡の穴ハ口也口の上ハ文といふ字は客といふ
字とての精進の實をいへばよと御しえしありといふ事をわれもたけりを仰されき

瀧り瀧の問答

○一休尙和山居一てあハしは冬ときしたしく御出入申す仁塞ぞの御見舞申せし折がよにこそ瀧
をまゐりの玉ふところへ参り合てよめる

山居して心まますと聞ぬる瀧り瀧をいしかで飲らん

其と和尙とりのあハす

山居まてのむまゝものを瀧り瀧けとても浮世ふすむ身でもあじ

と遊さじれるとや

山伏と問答の事

○一休關東へおもむかせ玉ふとき供人なき御つれある事をいとひ玉ひて普化僧のすがたとなり
尺八を吹て通らせ給ふを遣ふて和尙を見しとたる山伏にひ玉ひし山伏じよぬ躰にてとひ
をかけゝるにといのに普化僧の何方へ行給ふといふ和尙たえて仰けるには風ふまかせて
と仰ければ山伏はひけるは風なきとたのいあん和尙たえて仰けるにと吹て行とありければ
山伏もかを、られて口をとちあをを見ずして過けるとかや

壁ふ寄する懸といふ題にて詩歌を詠じ給ふ事

○一休和尙のかる口なる御事をよくしりたる人御作意を聞んと御庵へ参り壁に寄る懸といふ題

みて歌一首遊し候へと所望なしければ取らば

君まづちこねさやひとりぬるべかり

懸にしたらちのなはたちけり

と多そはむける又烟の懸とはふ題にて詩を一首さふみければ

再々 輕烟 惹恨 長 六宮 實罷 月昏 黃

羊車 不至 芙蓉 殿 知有 佳 人 漫 柱 香

不動の古佛の事

○或人不動明王の古佛と秘藏して安置し居けるが常々其家へ一休ころろ安く行給ふると死彼

不測を御覽じてやがて一時を賦し給ひける

全 肺 眞 黒 稱 明 王 生 付 片 輪 日 口 帳

一 生 不 犯 無 念 者 去 何 處 固 護 廣 堂

かく七言絶句を作り給ひ汝いふにも不動を信するまら其の尊像を給がれてるこふとして
筆をとり給ひてさうりく大筆にて水中小岩ニツニツを給がき給ひて大字にて不動尊とあそ
ばしかく岩のとくみ心をうごかき筆をむきと示し玉はり

生前死後を示し玉ふ事

○ある人一休和尚に生死のときはいかん心得てしかるべきやと問ふ和尚のいはく忠孝仁義に過

たるの無しと仰けれがいうふも有がたく心得申候死ての後は以かん火葬の、ちの茶蓋草とや

あらん汝何とて死後をいかるぞや自得せよ生あるものい必死あり平生臨終のときと思は、臨

終のときも平生なま日前に死苦いたるとを驚くに足らずして生死ふ念をかけずんを微塵も取

する事なしとて一絶を賦てあたへ給ふ

不 辭 因 果 受 塵 纏 止 水 野 觀 垂 柳 邊

明 鏡 本 分 月 下 客 花 辰 興 到 樂 皇 天

また問ふ如何か是佛一休答て曰

河伯來りて水を求む

河伯の水の神なり世界の水と我手のものをさし置て却て外に水を求むるがとく汝が本分

の佛性を顯て自知せよ

佛にのころもなうす身もならず

ならぬものこそならぬなりけり

一絶を賦して云

無 始 無 終 我 一 心 不 成 佛 性 本 來 心

一休諸國物語 拾遺

一休諸國物語 拾遺

本來成佛安語 衆生本來迷道必

じやうといふいたづらものが世に出て

多くの人を迷とするかな

野隱の意の前篇にくわしく爰に尋す

龍川新右衛門 戲問答

○あるとて龍川つれづれなる折から和尚さまの許へまゐりたつたふれたる事を御尋中すとて

このうたのこゝろのーらと恐らくハ

釋迦も達磨も定家家隆も

一休返歌ふ

釋迦達磨定家家隆もしらぬ哉

くその役ふとく、ぬなりけり

龍川 むもかげのかつらぬとさつはかばかり

かはりてだにも命をしぎよ

一休 れもかげはかつらかつれ年もよれ

無病よく才死ささごつとり

同 世の中にさきかせたちぬ花すゝき

まねのばか野へも山へも

○御一代のうちに狂詩の多かりしを前集に出しぬれと命じられたるを出す余ハ狂詩集

を見給へかし

於一谷

春永三年三月九日 源平合戦無二中斗一 海底死人幾萬千

有口不茶釜 至体圓 不離色相絶諸縁

井香大不海江河水 吐出趙州一味禪

鳥亦說經似度他 樹頭樹庭妙音多

林間花若諸菩薩 中有黃鶯小釋迦

又題一谷 九郎冠者大高名

打落平家無敵兵

一休諸國物語 拾遺

二百七十五

一休諸國物語 搜遺 一 朝 懸 向 上 時 聲

數 盛 魚 谷 進 速 一 朝 懸 向 上 時 聲

移 東 山 落 之 時 進 速 一 朝 懸 向 上 時 聲

一 我 此 男 根 八 寸 強 夜 來 抱 汝 臥 空 床

生 朝 大 將 秘 藏 馬 後 元 來 見 來 更 無 骨

那 題 蚤 非 磨 墨 後 元 來 見 來 更 無 骨

雖 為 人 喰 十 分 肥 瘦 僧 一 打 沒 生 涯

當 有 錢 有 酒 有 金 銀 未 中 案 內 往 來 頻

日 夜 思 君 長 不 忘 夜 深 懸 幕 臥 空 床

花 咲 同 花 而 易 老 花 花 頹 花 盛 夢 中 花

生 天 成 佛 因 思 君 胸 下 吟 詩 瘦 十 分

有 力 秋 風 不 應 拂 胸 下 吟 詩 瘦 十 分

慇懃三酒性靈水 水出推波地獄門

布袋依我眠 人言是座禪 工夫無一字

大食腹便々

魚父

無恨風夜吟

學道參禪失本心

無恨風夜吟

江暮雨楚雲月

無恨風夜吟

扶桑國裏沒禪師

東海兒孫更有誰

今日窮途無限淚

他時吾道竟何之

東海兒孫正邪不辨盡偏知

狂雲身上自尿臭 飽飮封書小飽詩

或儒者或教育家信

不啻人天大衆僧

巖來 幅幅 暮堂 理 怪長 無明 滅法 靈

○ばちを葉のにこりにそまぬ露の身いた 其まゝの真如實相

○佛とてやのふもとむるこゝろこそまよひの中のみまよひなとける

○ちればさき咲け又ちる春との花のすがたは如來常住

○ぬらうつる袖のなみだのかはくまもあき面かげの月ろ立とふ

○おのづから身いたづらに成ふけりこころを常のをみ家と思へば

○かりの世にあだなる露の身をもちて干とせをぬふ人のはかなさ

○世のうさにかへてすみぬる柴の屑に問ひまかぬ人もうちめし

○妙なりてはのちすの花の身い幾世ふるとも色はかはらじ

○其ま、ふうまれあがらの心ころ結がはずとてもほとけなるべし

○露ときへまふるしと愛を積つまのかげの如くに身は思ふべし

○なげくなよ誠の道ばうのまゝにふたつともなく又三ツともなし

○らくくくと心にてこそ彼岸にわたるもやすき法のふる人

○生死のことわりしらぬ坊さまは犬の衣を死たるなるべし



一のとき
 竹の葉の
 香の匂い
 のつゝと
 山吹の
 花の香
 けりて
 海の上
 舟の
 帆の
 影の
 けりて



竹の葉の
 香の匂い
 のつゝと
 山吹の
 花の香
 けりて
 海の上
 舟の
 帆の
 影の
 けりて

民將軍の侍代ありかの夢想ごとくまことりの御歌に
夢の世にゆめのとくに生れ来て

つゆなきへなん身ころやまけれ

夫人間のありきま萬事といはまる事なしもとより生のはじめをしらされば死のをはりをどきま
へすやみくぼうくとして苦みの海よしづむなり佛を、を哀とおぼしめて色くの侍方へ
んにて衆生をすくひ給ふされども人間のこころ不同にきて惡道へあゆむをす、み善方への心
す、みろくいとづらに光陰をめぐりあはれみの業果たへすまじく教にたがふといへども
名利の善をなすとばかりなり名利と申し其身の名をあげ人にとめられんと思ふ心をかねて
て堂塔を建立しときの高貴ふむをけり斯の事くの人を佛にふかくきらへせ給ふまるとの道に
萬事法度をそむかす世心したがひてかたく法を守る人を佛道に成就の人と申なり淨年ものや
くれ近く成らせ給へを何の御望御さしとんや殊さぶぢとくの話をもしうし先されはうへの行
く氷のふとくに侍心をまたせ給ひて淨土のうちは何事御さなくはへば世尊御一代の御身とは
塵あるへくはこころとるどけ三都經に已心の彌陀唯心の淨土とのま玉此文字の心なるのれか
こころの彌陀たごころの淨土と申せしかれたまは十萬億土の御身かひあるまじく候
佛のなまをさすの世心とていひ

たゞ慈悲心にもやものぞるし

勇うこのごとくに御下のよう候へを何事も佛心と見まらせ申へ候古一へ舟田の御つうじ
あうみて宗建をのじめまらせ人々をささせ給ひ候事夢とはるほしめされす候や申すでもつ
くーがたきはかやうふらあげに御入候てわたくしもながらへ佛法の御事をも申上まらせ候
御事は他生の縁ふかくとそんじ候因果經に自以唯ならんと佛も御のへ候また母ふて候ものは
七十六あて去年相はてくれ候心昌と申せし辭世の歌

世々ごとく見えつかくれつまむ月の

かづらぬ色をたれかいらまじ

此歌をくちすさとして其のちのうれさまへ参りて御善美の心をす、め申しへとくりかへし申ぎ
れいつるかの御めををるむきがたぐんとはひてたびく参りいつる母にてはもの、事おもひ
出し参らせしへ一しはそなへ参りたく社へのやとれさまの御覺悟も大あらく道の
御心つきひへのめで度満足いたしし御なぐさみまとはは御のんきおもしかるべくは御心つく
してと夢と御夢といましくは大般若の文に一切不行を佛の行とを御座は愛をもつて世さる
知照のうたふ

あや葉や藍空を家と住なして

出るとも入とも月をみるはねて

心ふかゝる山の端もなし

これの生死にとりあはぬところの歌みてはよく〜御江夫あるべくは又弘法大師の御辭世に
今はくや後世のつとめもせなりけり

あらんので二半のゐるにまゐせて

いづれもさとりの人のかやうに日まぶさひやう申あられいまだ慈観和尙のうたに

のこの世にまゝ旅ねまてくさまゝくち

おもひの世ふまゝおもひを見あふな

引よせてもそへば草の庵にて

さこれづもとの野はらなまほり

是は色相の上をかくく思し召候へとの心にては何の日いつの時御大事来り参らせいと御心
の中は何事も思召ひまゝくは病難もしいたくせめ兼いと其苦しきにまかせて相果しへと大
唐の青葉禪師の傳心の法要と申にも書置れ日本ふてハ聖徳太子病なんのとき御歌遊ばされ候
うき雲のゆくへもかゝれ空に宿

月はくまをたひかり続けり

此歌の心は何事も取合ひので無念無想の所を用ひいへとの御事にては又もらの開山の歌に

何事も夢まほろしとさとり来て

うつゝ、あき世のすまひありけり

此哥のふゝろひいなる大王さき其外上下の人ふかあしと給ふは死の道にて候ふ、をさへ
御のくさひへばするのち安ようの淨土九品のれんげにまといれて大安樂の御身とあせられたま
ぬへま大世尊の御説法を女人成佛のかたき事をかくとき給ふのやうの事を聞こしめして同
道心してさせ給ふまじくは其ことばりを荒々申あげは男子に生をうけ申ひてのこらす成佛す
べきふあらずとふ龍女の八才ふして三國ふ名を残り申ひ御經ふをはめ給ふ然ハ女人ころあは
もとのもまた御事にてはへ成佛とてへつたつときひがともなち奇特をも見せ申事はあ
るほしくは御さとの御心中にこれを御不審いはぬと思召し事御座なく候を大のさとりと申
事にては佛御入滅の、ち祖師先徳のさたも給ふ御法にを見理受用のふたつにて御入は三ぞく
をも御太師お思しめしましくは五劫百かい五百かいをたてられし事もたゞ一身のさたてて御
入は御女房衆の御さとり有しハ 嵯峨天皇の御さきき檀林皇后あり其外人の数をしらす美濃
のくはは衆性寺の千代能と申女さとりては其歌に

さなるくはくみし桶の底ぬけて
氷のまらねば月もやがらず

かやうの事を聞しめして今日より藤宗のさんばく御心をつくし給ふへは愚僧御手を引申す
人しきつづくくさくさの御心をた、せ給ひ後世を御たすかりひんを御かくとひへとす、め
申もの何者や又かやうふ不審をうら申もの何ものぞやと目に見えき一てさまくあり
ゆくゆるふ六道とんるのたねと成事を佛ふれを三かくと説給ふ一にけんどん二よりかり腹立
ると三にぐちの心この三つをたちひへといひしへ今にいたるまでしめまなりこれを一らされ
け愛さうの心ふかき故ふ人をねたみとしりあればうらみこんじてたがひふ苦しみのまみだを
流し袖をしぼるあり是と一心のわざなり久しく遠き事を観十物をわまれざるも一心なと四
百四病をうら大苦をうくるも一心也雪霜のさむき事をいとひ大温を苦となすも心なりされば
此心一ツを取とのがたければ六道のごうたへす生に生をかさね死に死をつぎうき沈むのみな
り此心といふものいかにとんじ申に影かたちもなれものなりかたちなき故に消うせずま
かれバ生もなく死もなしこ、を佛とも金剛の正体ともと給ふまど無相にして有たるが故ふ
古来より行といまることとし住所をらふまじ色相の生滅ひあづかるふよつて無常と説き又ハ
大死とのべて是を懸かたまみて定難と申也のやうに申入は御心にかたちなき所を御らん

せられへと申事にては何ものる色相をさつて佛神とも鬼神とも成申へくひなり浄土と穢土
の事こ、を以て御分別あるべくし御不審のいれ申候へまよひの雲千重萬里の外ふひなひ一
つとして御心と、まる事あるまじく候へ、を大正覺と申なりこ、にいたりて心經にも色即是
空空即是色と、記給ふ一心の外よすちのものな本より經にもな一心と無始覺終にまで住所
をいぬれて大解脱の御身となすせ玉ふべし
御工夫にも古則話頭御不審のなれ候よし仰られ候尤に候むの御僧たちの集め給ふなら
へをあらくかきふて得るべきにみるし参らせし
本來は面目のしめしやう不思議不思議未生已前いつれの所よと來る又いかにあるが是本來の
めんばくと斗もさひす此言葉をうけとりて三十日五十日乃至一年二年くふうをさけて案じ
申やうの我が身の生の所と佛もいつれの祖師もまられましくい佛祖ふしぎの所是にていと申
いへバ此上ふまゆようとしていろく大事あるよし長老アされい間また是を工夫してややうハ
天地開闢よりこのた知られまじきとじのようそ愛て長老尤のよし申されい學者の智にを
しきふよつて其語ををるなま大かた此分にい
はくじのし話頭といかあるの是としさいららとふこ、にて祖師のいらく庭前の栢樹



予とこれふ心をきんせよと申にしかふして學者の曰祖師の再來庭前のはくじゆにも同じ心ふ
てはは、天然の理にては前後一らぬ心ふくはさてちやく語に松と直く荆のまがれりと申又色
相分離してのちいかにと、ふ松直かすす荆曲らすとす三度四度するへしてこれを至極の道理
とすす是の柳のみぎり花のむれをひのこ、ろなり此極意の口といふ根本無相ある處をしらん
がためなり大かた此分に候
萬ぼらうふりうといふ古則よろづに友とらざる人みれ何人子やと問ふがくしや耳をそなたて、
運を陽き年月へて申やうて我が一心の萬法の外にて候躰も色も香も候物にくとせぬものに候
しかも天にみほひ地に満りしかれば左右もなく脚下まんにして有ける故に法界一心とく
はんとて大國のはう居士名を殘すこれの目に見ぬ物の有所を見出しふかくのこく申也地獄此
ときやふれ申候心御入候也

本有圓成の事はんりの佛何の縁をもつてめいとふの衆生とるどたるぞや學者くふうまで申
やうは根本の無念無相の佛なると衆生の色縁にひかれてのやうふ寒うん苦樂を得る身となり
來て候愛ふ念をとめ此界にらんるなくの本身の佛性ふなるとて此とき種々無量となし
く言葉をつくし善根しやうと見るなり
その話の事釋迦みろくのかれが奴かれのたろふのさともうけて年月へて老僧の前へ出て

塵上ふを尙無く眼せんに我もじと申て一味平等のところ何か差別あらんや然らぬ奴もあし我
もなし上下元來佛も衆生も一躰ならずや大かた此分の心にて候
いかあるかこれ地獄としめされて年月を経て工夫して申すやうの眼前みれ地獄を申又とふ何
事に地獄を色相みれぢぢとなり色相分離してはいかふ眼光落地すこ、に見えを智慧によつて
種々の業をうけ大利益無ふ落候てあさよし候

このんかけるとさのいかん學まやのいにく小魚大魚を香又かたてのちい候ん大魚小魚との
む此心の舟の帆か、りてあるときの大なる魚がちのさきうを、のむといふ也ほのか、うさる
ときは小なる魚が大なるをのむといふこ、ろなり此ふ、ろの諸宗に少しも知らず禪家の大
事なり有と申さんとしてハ世ふある事を吐く語をかかま又無ある事を申さんとは世になき事
を吐て心をかくして生死思推の處をむつかしく申せん爲あり御遊り御座候直に申べく候なり
もんざいの三よう三立と申事の候かやうの事は申つくしがたくハ天地の間に三つもとむ三つ
くろまど申事何や是をしかも三ぼうと申事ありとく心の心ハ父母と我と是三つの寶なり一
つもかけては物ならずハ三立と申のみなもとの無性ハくろたかたちなり出生して萬の事を行
ひハ愛に大秘密の事ありやうの字みれ則大事あり
大國のなんせん和尙此猫兒を切る事ハ大衆こたへざるもまなり趙州愛ふ來つてさうあひを取

てかじうへあげ衣を脱ふて、和尙のまへに出る和尙このときねこを切て後悔すてうまう甚もつてめんばく成る第一に色相の逆意を免るなり迷ひの衆生色心ともに切とを得ずたま〜切といへきをどんだうなれば放る、所なし文珠のりんんふた、びつがきと中心にていりんさいの四かつとて人の死たる所ふたりてあつすの心たしかに心得たる僧まれなりたゞじやうしゆう僧と中の本ふんにをとしてこれを至極す古人の見世此所ふらそをでにりんざいの命根本不絶といへりしかれを當時の僧たら大なるあやまちありとはまぢくふして衣をかへ人の目をつぶして布施物を取り己が生じ世々ののはをまねくあはれむべきの第一なま百丈やこの話の事大まおきやうていの人かへつて因果あるや又なしやと、ふ答ていはく因果ふ落すとなり此報によりて五百生野狐の身に墮していんぐのはれき然あるものと申むねにて候未ささらずして別にふかき事御座候はんと思召まよく候此ふといろの因果を申いんぐのふくちかうすとの事をり深く因果をいぬちすといふ心ふて候此話問のまなは生々世々の事をきつねふよせてどのれたる所大智なるもあに大智禪師とかや申なり一朝大國ふていんぐ佛道しも行の事れん〜に申上まぬらせ候又申す人迷ふとき火をもつて火をげさんとく土をもつて山をかこはんとすのやうをろかなる事ハ人々佛道ふ心の遠さかる事萬里をへたて、手には百八ばんなうのきづなある珠数をつまぐり二世三世をいのり生れう死れうのた、

りを見いだし石塔卒都婆ふききくのありとるもひ梓にかけ死人と言葉をかへる事をいひて袖をしぼるもろ〜の教もろ〜の道理を失ひ佛ぼさつにまう語をかけ義理をろむき彌〜もろもくのどく竹のうちより天をのかる物の生々世々うとむとあるべからず西方非西方非東無地獄無極樂淨土非淨土けんせんをきらせしてまかも又しのも外の大空さんまいにして大蓮化のうちにありたい正直のじひぎやう無さんなり念をきつてしかもきらす是を通力自在のきうと申也から國我朝にいたり上下萬民佛道をねがふ事何宗のしうとて色々たて、ハありといへも其源のいづれも極樂じやうさふたり地獄ふるとすまじきとの方便也此淨土といふハ何處なれと我心のうちにあり又地獄ハいづれぞなれと大事我心のうちにあり或人達广大師みとふ地獄ハいづれの所子やこたへては〜汝が心中にとんじんちの三毒これなりとんじんちとは貪と欲とく萬の愛念執着の欲を申あり慎との腹をたつる念を申強とのぐちとて何事も心のま、になき事をなげき歎しと我とわが心を悩ます事を申あり此三毒かくの如く善惡の報をつくり出し地獄ふつるなまぢくとして別に余の世界にある事にてハあらず又問極樂といづれのところやふとへていんぐ極樂淨土とて外にあるべからず汝が心中の三毒を拂ふ處すあハち淨土なりと答給ふ佛と衆生とへだて有事なま迷ひの衆生此とんじんち我本心ふてなき事をしらす一念あり、又にくもふよりて地獄にむつるなりとの三毒をもとあして八萬四千



のほんのう翻るなりふれ則地獄なり佛といふもさるといふも名はかかれざる同じ道也且本心をさとする人をすなはち佛と名づくるなりしもの我心の外に別に佛なき事をよく心得て此上を常とて、ろにかけ御工夫あらと道に御あたと候はん事うたがひあるべからずし現在の果を見て過去未來をしるを御經にときをわれゆるの心と今こゝふて惡心惡道をこゝろにわすれずしてつゝ、しみ善事の心あつて取出し行ふ事也今此生にて其心を正すれずば又今の心を未來へ引て人に生をいとすべきとの事なり佛の萬の自在を得たりといへとも見あたざる事あり一に無縁の衆生度するところの二に衆生かいつくる事あたハ三ふのようとう轉ずる事あたハす前世のほういんによりかんとくまたる善惡のこつハうなりかやうの決定の業のうをバ佛ぼさつの身にても轉するとかきはす形の善惡福徳の大小壽命の長短衆生の高低の事これ皆前世の業因にたへたる定業なり慈悲しんハ福徳の家たうまれ慳貪は貧苦の身にけなり柔和ふんふくの心おますがたよく生れさてハ高位高家たうまる、なり衆生したるもの短命がうまる、かくのとくいづれもみま前世の惡心より惡果を得たる人ふのよさはりをしりて今世ふて惡行をつくらずと來世はのちらす善果を得べき事居士は朝の祖常達をばじめ數多の知識のふとも書讀し給ふ事をもまめし奉らす

一休國物語 拾遺

明治十九年十月五日 翻刻御届
 明治二十年一月七日 再版御届

定價一圓五十錢

東京府平民

翻刻兼出版人

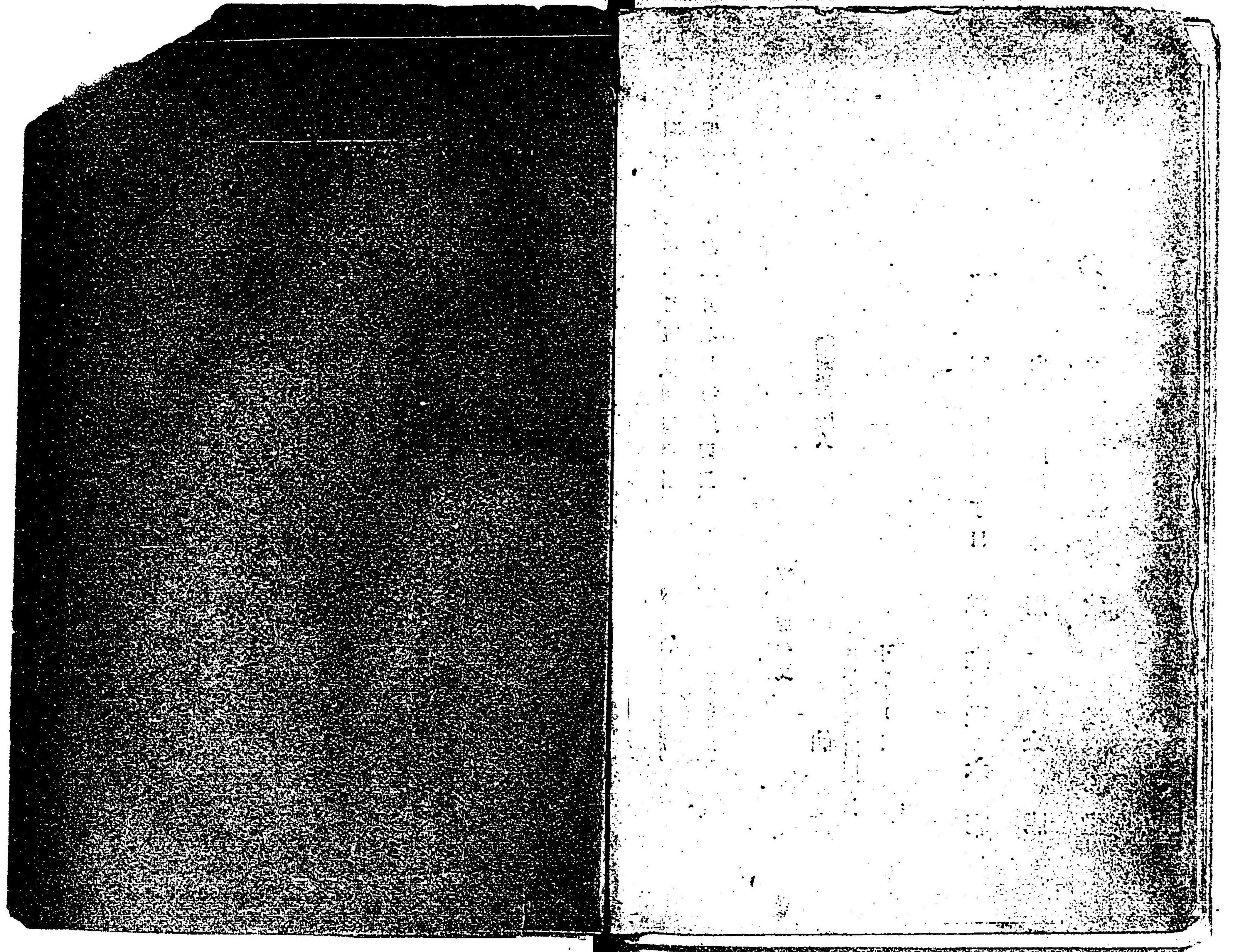
森 仙 吉

日本橋區橋町四丁目
 十一番地

發 東京橋町四丁目 鶴聲社本店

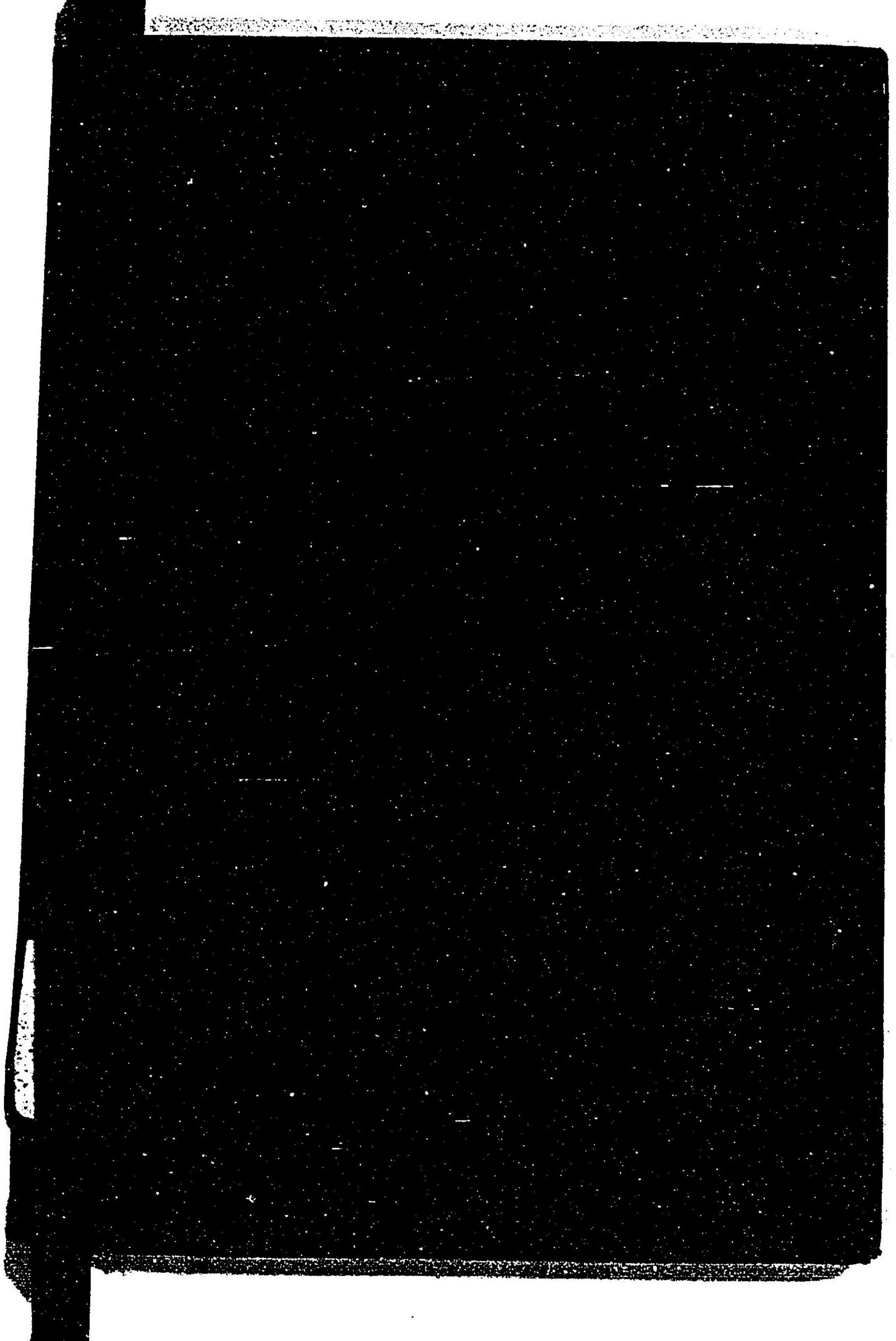
大坂心齋橋南詰 同 支店

兌 西京寺町松原南 改進堂



26

291



26
291

019336-000-5

26-291

一休諸国物語

平田 止水/編

M20. 1

ABG-0022



